

茨城県教育財団文化財調査報告第237集

坏 戸 遺 跡

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内
埋 藏 文 化 財 調 査 報 告 書 Ⅱ

平成17年3月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第237集

坏 戸 遺 跡

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

平成17年3月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、保険・医療・福祉サービスや世代間交流などの機能を備えたまちづくりのモデルとして、茨城町において、やさしさのまち『桜の郷』整備事業を推進しています。その一環として、一般国道6号から桜の郷へのアクセス道路建設として主要地方道内原塩崎線道路改良事業が計画されました。その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である坪戸遺跡をはじめ多くの遺跡が存在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財の発掘事業についての委託を受け、平成15年12月から平成16年1月まで発掘調査を実施しました。

本書は、坪戸遺跡の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤 佳郎

例　　言

1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成15年度に発掘調査を実施した、茨城県東茨城郡茨城町前田1139番地ほかに所在する^{あくと}壱戸遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調　　査 平成15年12月1日～平成16年1月31日

整　　理 平成16年12月1日～平成17年1月31日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼第3班長 村上和彦

主任調査員 綿引英樹

調査員 鹿島直樹

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、主任調査員綿引英樹が担当した。

凡　　例

1 地区設定は、日本平面直角座標第X系座標（世界測地系）に準拠し、X軸=+34,840m, Y=+53,320mの交点を基準点（A1a1）とした。この基準点を基に、遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…, 西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa, b, c…j, 西から東へ1, 2, 3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

2 遺構・遺物・土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 S I - 住居跡 S B - 掘立柱建物跡 S K - 土坑 S D - 溝跡 P - 柱穴

S X - 不明遺構

遺物 P - 土器 D P - 土製品 Q - 石器・石製品 M - 金属製品 T P - 拓本土器

土層 K - 搅乱

3 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

 火床面・赤彩・釉  溶着材  炉壁粘土材

 瓮部材（粘土）  煤

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 ----- 硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、遺構実測図は60分の1に縮尺して掲載した。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合がある。

6 「主軸」は、竈を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸」及び「長軸」方向は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

7 遺物観察表における土器の計測値の単位はcmである。なお、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

抄 錄

ふりがな	あくといせき								
書名	坪戸遺跡								
副書名	主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書								
卷次	II								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告								
シリーズ番号	第237集								
著者名	綿引 英樹								
編集機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587								
発行機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587								
発行日月日	2005(平成17)年3月31日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
坪戸遺跡	いばらきけんひがしひらきぐん 茨城県東茨城郡 いばらきまちまえだ 茨城町前田1139番 地ほか	08302	36度 18分 188	140度 25分 43秒	15 ~ 20m	20031201 ~ 20040131	3,543m ²	主要地方道内原塩 崎線道路改良に伴 う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
坪戸遺跡	獵場	縄文	陥し穴		1基	土師器(壙・甕) 瓦質土器(火鉢) 陶器(丸碗・土瓶)			検出された遺構や出土遺物は少ないが、縄文時代から近世までの複合遺跡であることが確認された。 弥生時代の土坑が1基確認され土器棺墓の可能性もある。
	集落跡	古墳	竪穴住居跡		1軒				
	墓地	近世	墓壙		1基				
	その他	弥生 近世 時期不明	土坑 溝跡 方形竪穴遺構 円形周溝状遺構 溝跡 柵跡 土坑 ピット群	1基 1条 3基 1基 3条 1列 49基 3か所	1基 3基 1基 1基 49基	繩文土器片、弥生土器(壺)、土師器(椀・高台付壙・甕・小形甕)、土師質土器(小皿)、陶・磁器(小皿・碗)、土製品(紡錘車・羽口)、石器(打製石斧・磨石・敲石)			

目 次

序

例言

凡例

抄録

目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 縄文時代の遺構	8
陥し穴	8
2 弥生時代の遺構と遺物	8
土坑	8
3 古墳時代の遺構と遺物	10
豎穴住居跡	10
4 近世の遺構と遺物	12
(1) 墓壙	12
(2) 溝跡	13
5 その他の遺構と遺物	15
(1) 方形豎穴遺構	15
(2) 円形周溝状遺構	17
(3) 溝跡	18
(4) 柵跡	20
(5) 土坑	20
(6) ピット群	27
(7) 遺構外出土遺物	28
第4節 まとめ	35

写真図版

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、東茨城郡茨城町前田地区において、一般国道6号から「桜の郷」へのアクセス道路として、主要地方道内原塩崎線の道路改良事業を進めている。

平成8年9月17日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塩崎線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。

これを受けた茨城県教育委員会は、平成12年10月10日に現地踏査、平成12年11月27～29日に試掘調査を実施し、坪戸遺跡の所在を確認した。平成13年1月17日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長に対して、事業地内に坪戸遺跡が所在する旨を回答した。

平成13年2月9日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成13年2月26日、茨城県水戸土木事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成14年12月6日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塩崎線道路改良事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成14年12月20日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長に対して、坪戸遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

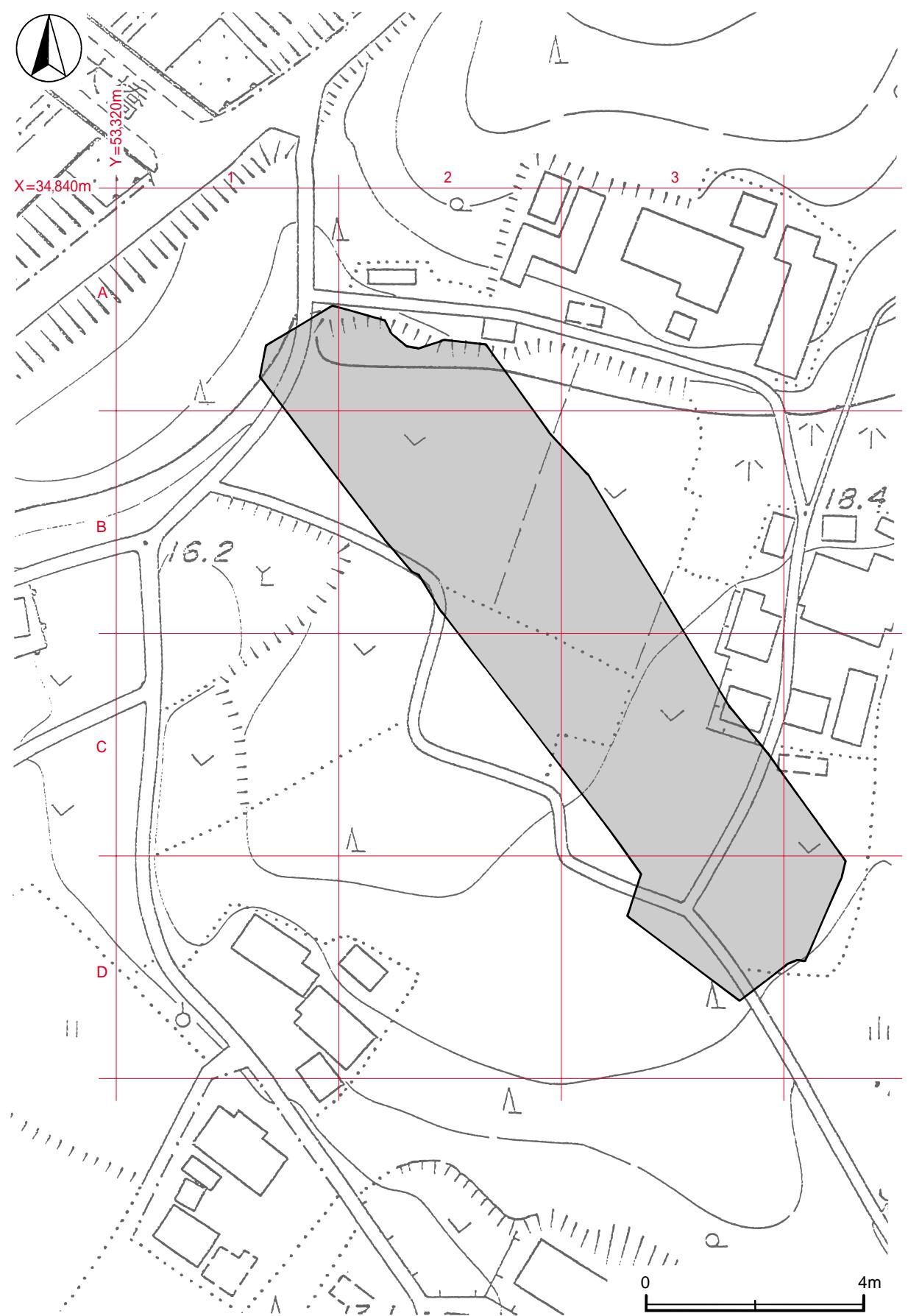
財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成15年12月1日から平成16年1月31日まで坪戸遺跡の発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

坪戸遺跡の調査は、平成15年12月1日から平成16年1月31日まで実施した。

以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	12月	1月
調査準備			
表土除去			
遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄			
注記作業			
写真整理			
補足調査			
撤収			



第1図 坯戸遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

坪戸遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字前田1139番地ほかに所在している。

茨城町は、町のほぼ中央部を東流する涸沼川の氾濫原と、その東に展開する涸沼の低湿地によって台地が南北に二分されている。台地の北部は標高25~30mで東茨城台地の先端部にあたり、北西から流れる涸沼前川を含む多くの支谷が涸沼方向に開口している。南部に発達している台地は、大谷川、寛政川が涸沼に流入し、その間に大小無数の支谷が台地深くまで侵入しており、北部台地に比べて起伏も多く一層複雑な地形を呈している。

地質をみると、台地を形成している最も古い地層は新生代第三紀の地層で、岩質は泥岩で水戸層と呼ばれている。水戸層の上には第四紀の地層が不整合に堆積している。さらに、粘土・砂からなる見和層、礫からなる上市層、灰褐色の常緑粘土層、関東ローム層の順に重なっており、これらの地層はいずれもほぼ水平堆積である。

当遺跡は茨城町北西部の前田地区にあり、涸沼川の支流、涸沼前川左岸の標高約15~20mの中位段上の南東に開けた小さな支谷を含めた範囲に位置しており、南東側へ徐々に標高が下がっている。北東側は東茨城台地へと続くため標高が高くなり、支谷を挟んだ南西側は中位段丘面が張り出して舌状の平坦部が形成されている。調査前の現況は畠地である。

第2節 歴史的環境

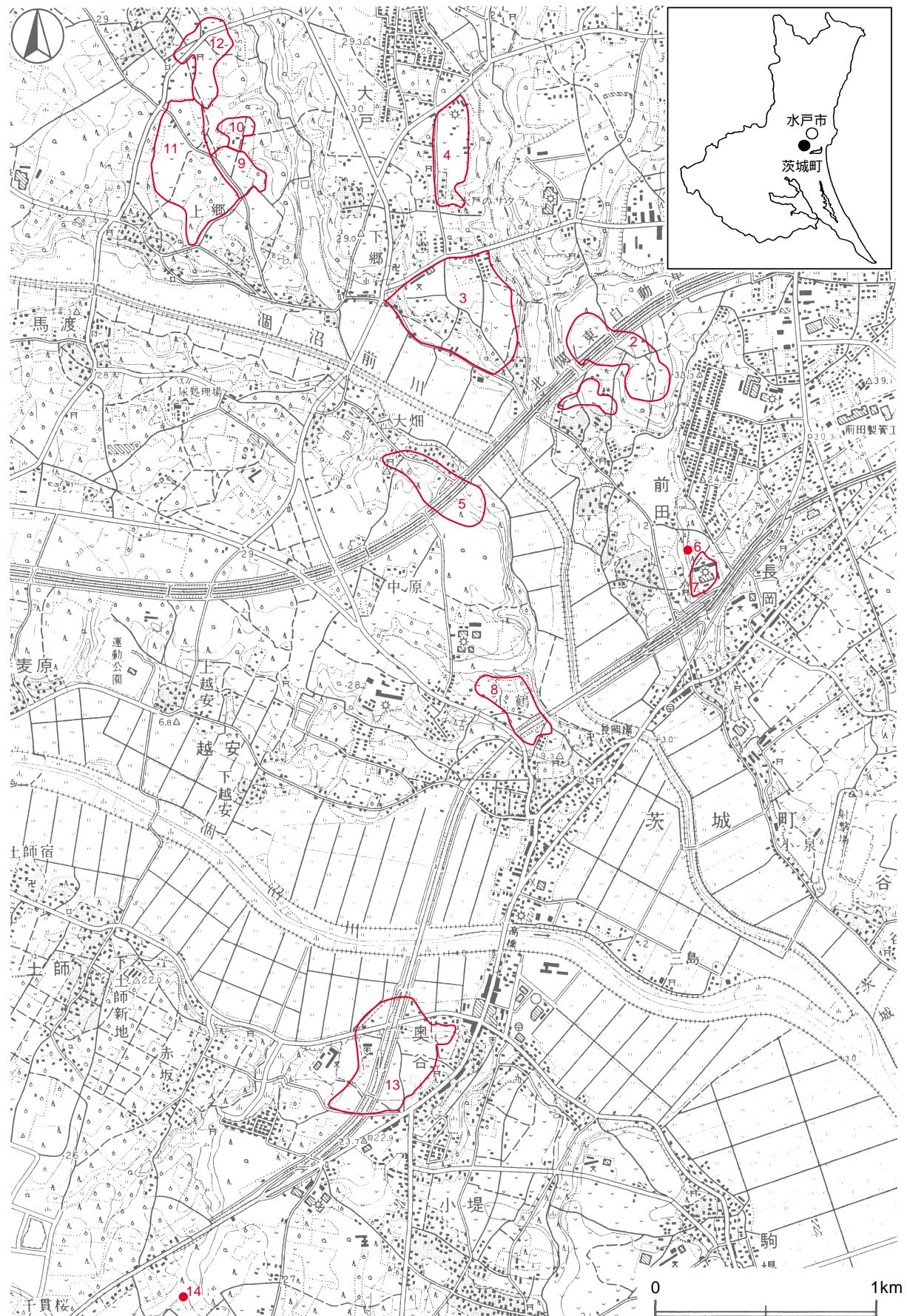
茨城町周辺には、縄文時代から中世・近世にかけての遺跡が数多く存在しており、涸沼を中心に中小河川を利用した水運に恵まれ、古代から人々が生活を営む場としては絶好の場所であった。ここでは、坪戸遺跡に関する主な遺跡について時代を追って述べることとする。

1 縄文時代

当遺跡周辺の縄文時代の遺跡としては、矢倉遺跡²⁾、^{やぐら} 大戸下郷遺跡³⁾、^{おおとしょう} 大戸神宮寺遺跡⁴⁾、^{おおとじんぐうじ} 大畑遺跡⁵⁾、^{おおばたけ} 宮後遺跡⁶⁾などが周知されている。平成10~12年度に調査された宮後遺跡¹⁾では、200基を超える土坑墓が放射状に配列されているのが確認された。また、それら土坑墓群の1基からは、長さ11.1cm、重さ200.0gの翡翠の大珠が出土している。

2 弥生時代

この時期の遺跡としては、大戸下郷遺跡、矢倉遺跡、大畑遺跡、長岡遺跡⁷⁾、^{ながおか} 小鶴遺跡⁸⁾、^{こづる} 石原遺跡⁹⁾、^{いしはら} 綱山遺跡¹⁰⁾、^{つなやま} 大塚遺跡¹¹⁾など多くの遺跡が確認されている。また、当遺跡で採取された後期後半（十王台式期）と同時期の集落としては矢倉遺跡²⁾（平成7年度調査）、大畑遺跡³⁾（平成8年度調査）、石原遺跡⁴⁾（平成10年度調査）、綱山遺跡⁵⁾（平成11年度調査）、大塚遺跡⁶⁾（平成11・12年度調査）、大戸下郷遺跡⁷⁾（平成14・16年度調査）などがあり、この時期には涸沼川流域を中心とする小文化圏があったことが想定されている。また、矢倉遺跡や大戸下郷遺跡では群馬県を中心に分布する樽式土器や栃木県を中心に分布する二軒屋式土器、本県南部に分布する上稻吉式土器が出土していることから、他地域との交流も指摘されている。



第2図 坂戸遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院「小鶴」）1：25,000

表1 坏戸遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世			旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
①	坏戸遺跡		○	○	○	○	○	○	8	小鶴遺跡		○	○				
2	矢倉遺跡		○	○	○	○			9	石原遺跡		○	○	○	○		
3	大戸下郷遺跡	○	○	○	○	○	○	○	10	綱山遺跡		○	○	○	○	○	
4	大戸神宮寺遺跡	○		○	○				11	大塚遺跡		○	○	○	○	○	
5	大畠遺跡	○	○	○	○	○	○	○	12	宮後遺跡	○	○	○	○	○	○	
6	上ノ山古墳			○					13	奥谷遺跡		○	○	○	○	○	
7	長岡遺跡			○	○				14	小幡北山埴輪製作遺跡				○			

3 古墳時代

この時期の遺跡は、当遺跡周辺でも矢倉遺跡、大戸下郷遺跡、大戸神宮寺遺跡、上ノ山古墳⁶⁾、大畠遺跡、石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡、宮後遺跡など、数多く確認されている。大戸下郷遺跡⁸⁾では、弥生時代後期後半の土器と古墳時代前期の土師器が共伴する住居内の墓壙からガラス小玉31点、琥珀玉1点が出土している。また、茨城町で唯一の前方後円墳である上ノ山古墳⁹⁾からは、南へ4kmほどに位置する小幡北山埴輪製作遺跡¹⁰⁾（14）で作られたとされる埴輪が出土している。

4 奈良時代・平安時代

律令制下の当方は、那賀郡八部郷、茨城郡島田郷・白川郷・安侯郷、鹿島郡宮前郷に属していた¹¹⁾。この時代の遺跡は町内全域で確認されており、矢倉遺跡、大戸下郷遺跡、大戸神宮寺遺跡、大畠遺跡、石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡、宮後遺跡、奥谷遺跡（13）など、100遺跡を数える¹²⁾ことができる。奥谷遺跡¹³⁾では、百数十点の墨書き土器のほか、円面硯や横刀が出土しており、特に、墨書きの「曹カ司」は、官衙などの庁舎の意味があり、奥谷遺跡が官衙的な公共施設を含む集落であったことを示している。また、宮後遺跡¹⁴⁾では、墨書き土器や円面硯が出土している。宮後遺跡に隣接する大塚遺跡¹⁵⁾からは「コ」の字状に並ぶ掘立柱建物跡が確認され、墨書き土器や円面硯・灰釉陶器なども出土している。さらに、綱山遺跡¹⁶⁾でも掘立柱建物跡が確認され、墨書き土器・円面硯・灰釉陶器が出土している。

5 中世・近世

中世の遺跡は主に城館跡である。小幡城跡、宮ヶ崎城跡、海老沢館跡、奥谷館跡、飯沼城跡などが所在している。小幡城跡は現存する町内の城館跡の中では最大規模で、初期の城主について小田一族や大塚一族などの説があるが、詳細については不明である。また、奥谷遺跡¹⁷⁾からは堀、地下式壇、方形堅穴状遺構、井戸跡などが確認され、土師質土器や陶器が出土している。

近世になると、町の中心部を南北に通ずる水戸街道沿いの長岡・小幡は宿駅として発展し、徳川期には水戸藩主の休憩・宿泊のために御殿が造られていた。近世中期以降になると、水戸街道は五街道に次ぐ脇往還として栄え、最盛期には23藩の大名が参勤交代のつどこの道を通過した¹⁸⁾。また、海老沢・綱掛は水上交通の要衝としても河岸を中心に栄え、水戸藩をはじめ、仙台藩や奥州諸藩と江戸を結ぶ輸送経路の中継基地として重要な役割を果たすようになった。

※ 文中の（ ）内の番号は、第2図表1の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 川又清明ほか「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 宮後遺跡1」「茨城県教育財団文化財調査報告」第188集 茨城県教育財団 2002年3月
- 2) 飯島一生「北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書I 矢倉遺跡・後口原遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第135集 茨城県教育財団 1998年3月
- 3) 長谷川聰「北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書II 大作遺跡・大畠遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第136集 茨城県教育財団 1998年3月
- 4) 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書I 石原遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第163集 茨城県教育財団 1999年3月
- 5) 荒藤克一郎ほか「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書VI 納山遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第243集 茨城県教育財団 2005年3月
- 6) 長谷川聰ほか「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書V 大塚遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第242集 茨城県教育財団 2005年3月
- 7) 近藤恒重「主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書I 大戸下郷遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第216集 茨城県教育財団 2004年3月
- 8) 註7) と同じ
- 9) 茨城町史編さん委員会『茨城町山ノ上古墳』 茨城町 1994年3月
- 10) 大塚初重ほか「小幡北山埴輪製作遺跡」 茨城町 1989年2月
- 11) 茨城町史編さん委員会『茨城町史 通史編』 茨城町教育委員会 1995年2月
- 12) 註11) と同じ
- 13) 註11) と同じ
- 14) 川又清明ほか「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書IV 宮後遺跡3」「茨城県教育財団文化財調査報告」第241集 茨城県教育財団 2005年3月
- 15) 註6) と同じ
- 16) 註5) と同じ
- 17) 鯉渕和彦「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財報告書 奥谷遺跡 小鶴遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第50集 茨城県教育財団 1989年3月
- 18) 註11) と同じ

参考文献

- ・ 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』 茨城県教育委員会 2001年3月
- ・ 蜂須紀夫『茨城県 地学ガイド』 コロナ社 1986年11月

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

坪戸遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字前田1139番地ほかに所在し、涸沼前川左岸、標高15～20mほどの中位段丘上に位置している。調査面積は3,543m²で、調査前の現況は畑地である。

今回の調査によって、縄文時代から近世までの遺構が確認された。検出された遺構は、縄文時代の陥し穴1基、弥生時代後期の土坑1基、古墳時代後期の竪穴住居跡1軒、近世の墓壙1基、溝跡1条の他に、時期不明の方形竪穴遺構3基、円形周溝状遺構1基、溝跡3条、柵跡1列、土坑49基、ピット群3か所である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20)で3箱分が出土した。主な出土遺物は、縄文土器片、弥生土器(壺)、土師器(壺・椀・高台付壺・高台付椀・甕・小形甕)、陶・磁器(小皿・碗・土瓶)、土師質土器(小皿・火鉢)、瓦質土器(火鉢)、土製品(紡錘車・羽口)、石器(打製石斧・磨石・敲石)などである。

第2節 基本層序

調査区中央部のC3a6区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は17.4mで、地表から約1.5m掘り下げ、第3図のような堆積状況を確認した。テストピット付近は、北西方向から南東方向にトレンチャーで耕作されており、テストピットの上層は攪乱を受けている。

以下、テストピットの観察から層序を説明する。

第1層は、ローム粒子を少量含む暗褐色のローム層で、粘性・締まりとも普通である。

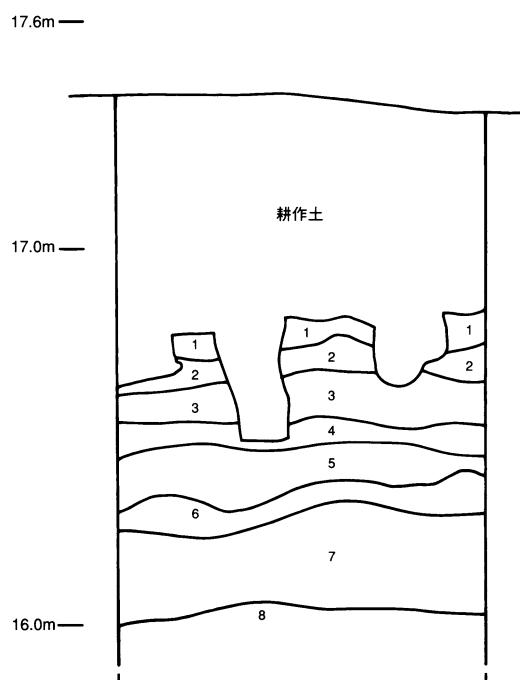
第2層は、ロームブロックを少量含む褐色のローム層で、厚さは10cm前後で、粘性・締まりとも普通である。

第3層は、ロームブロックを少量含むにぶい褐色のローム層で、厚さ6～18cm前後で一定していない。粘性は普通であるが、締まりがやや強い。

第4層は、白色粒子と鹿沼パミスを少量含む厚さ5～10cm前後の褐色のローム層で、粘土粒子を微量含んでいる。粘性は普通であるが、締まりがやや強い。

第5層は、灰褐色のローム層で、粘土粒子中量、白色粒子微量、鹿沼パミス少量含んでいることから鹿沼パミス層への漸移層と考えられる。厚さは10～20cm前後で、粘性は普通であるが、締まりがやや強い。

第6層は、橙色の鹿沼パミス層で、粘土粒子を少量含んでいる。厚さは6～12cmであり、粘性・締まりともに普通である。



第3図 基本土層図

第7層は、粘土粒子・粘土ブロックを少量含んでいる淡い褐色のハードローム層である。厚さは30cm前後で、粘性・締まりともにやや強く、常総粘土層の漸移層と考えられる。

第8層は、鉄分を含んだ明褐色の粘土層で、硬く締まっている。層厚は未掘のため確認できなかったが、7層よりも粘土の含有量が多いことから常総粘土層と考えられる。

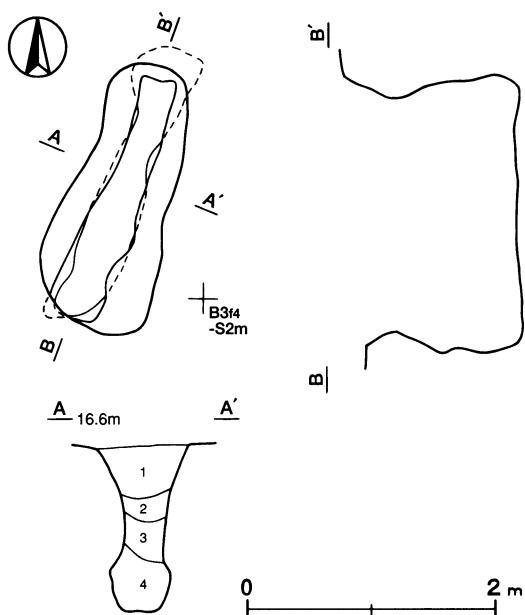
斜面地で、高低差があるため、遺構は2層～7層の間で確認されている。

第3節 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構

陥し穴が1基確認された。

第1号陥し穴（第4図）



第4図 第1号陥し穴実測図

2 弥生時代の遺構と遺物

土坑が1基確認された。

第40号土坑（第5図）

位置 調査区中央のC3d7区に位置している。

規模と形状 耕作機械による搅乱を受けているが、遺構の形状から径0.38mの円形と推測され、深さは31cmである。壁は直立し、上部で緩やかに外傾している。底面は平坦である。

覆土 5層に分層される。粘土ブロックなどを含むブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | |
|----------|--------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、粘土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック・砂粒中量 |

位置 調査区中央北寄りのB3f3区に位置している。

規模と形状 長径2.15m、短径0.75mの楕円形である。深さは1.31mで、長径方向はN-17°-Eである。長軸の壁はやや内傾して立ち上がり、上部では外傾している。また、横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

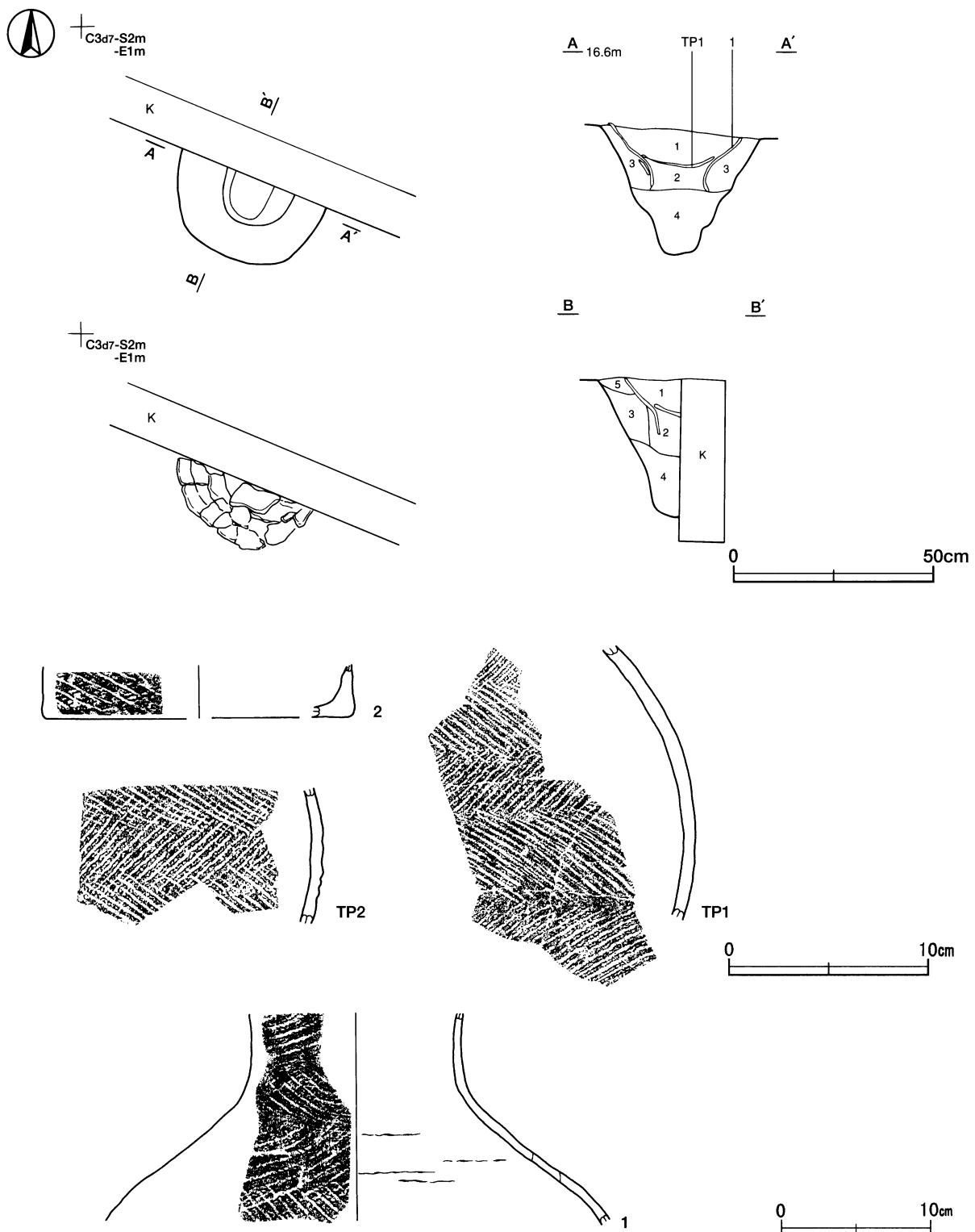
土層解説

- | | |
|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量 |

所見 遺物が出土していないため、時期の特定はできないが、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

遺物出土状況 弥生土器 3 点（壺類）が出土している。1 は逆位で、TP1・2 は 1 の頸部を塞ぐような状態でそれぞれ出土しており、2 は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期と考えられる。また、壺が逆位の状態で出土していることなどから土器棺墓の可能性もあるが、壺以外の出土遺物がなく、骨片や骨粉なども確認されなかったため明確ではない。



第5図 第40号土坑・出土遺物実測図

第40号土坑出土遺物観察表（第5図）

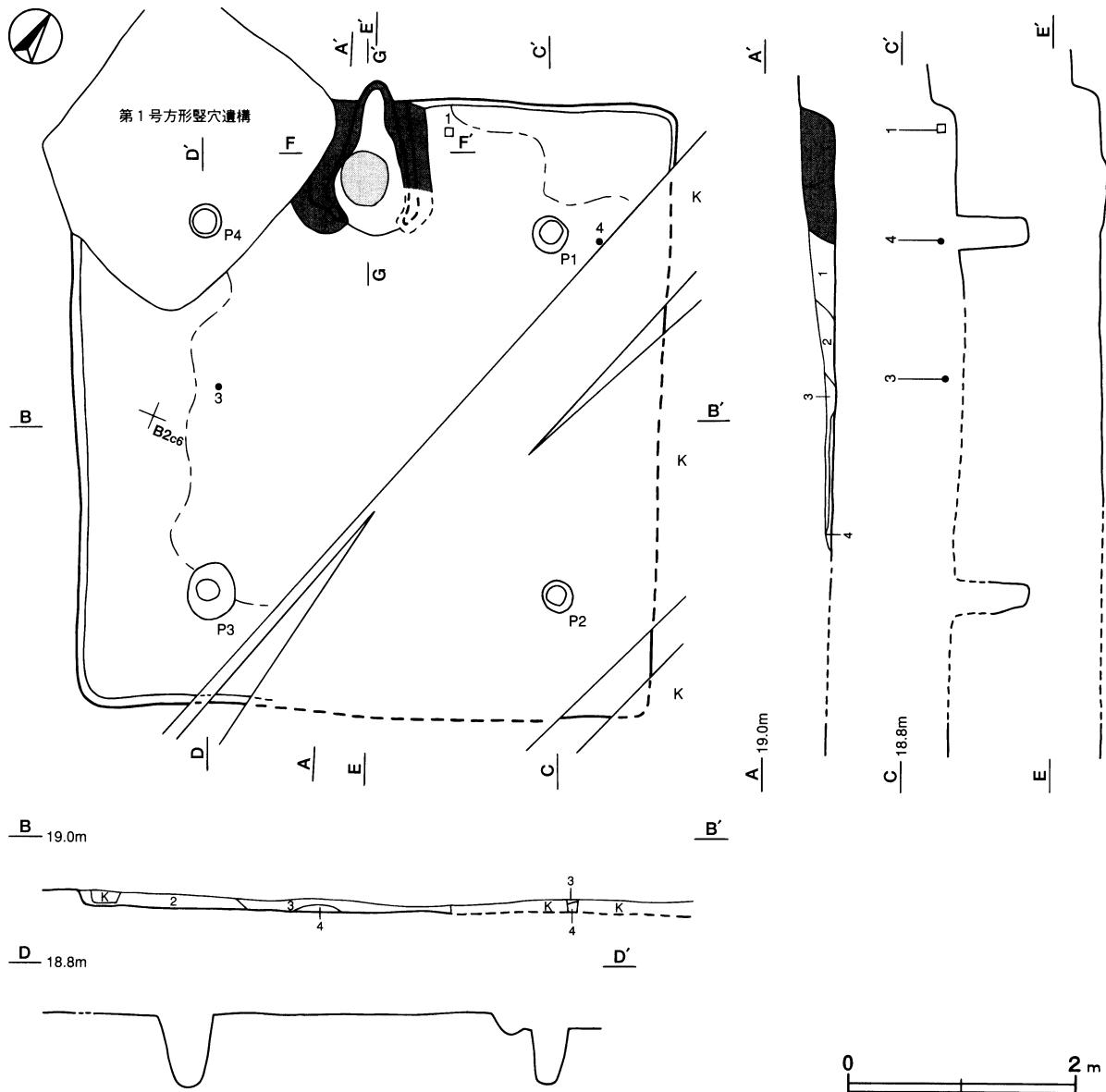
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(14.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	附加条二種(附加1条)の縄文施文, 輪積み痕	覆土下層	10% PL5
2	弥生土器	壺	-	(2.6)	[15.2]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	附加条二種(附加1条)の縄文施文, 底部砂目痕	覆土中	5%
TP1	弥生土器	壺	-	(13.5)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	附加条一種(附加2条)の縄文施文, 羽状構成	覆土下層	TP2と同一個体 PL6
TP2	弥生土器	壺	-	(6.7)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	附加条一種(附加2条)の縄文施文, 羽状構成	覆土下層	TP1と同一個体 PL6

3 古墳時代の遺構と遺物

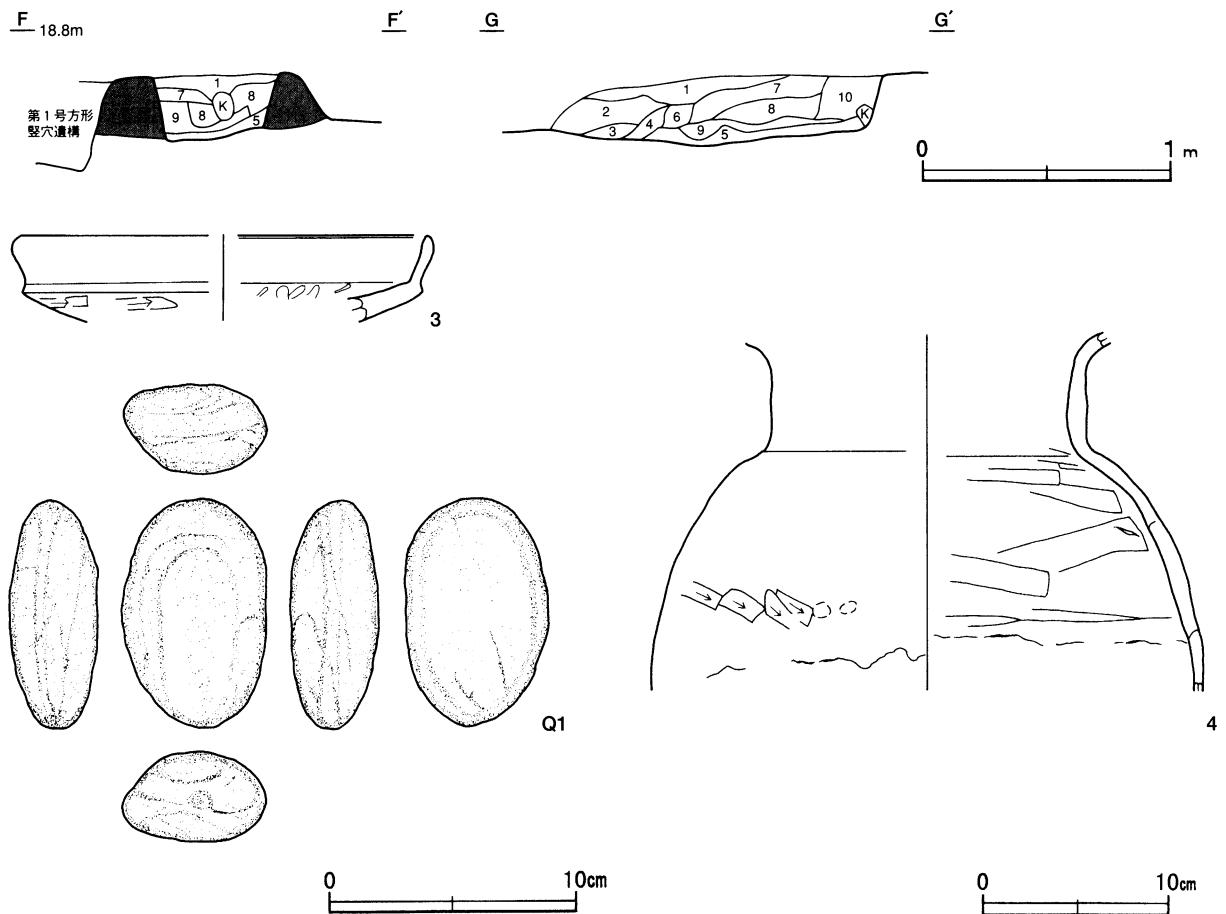
竪穴住居跡が1軒確認された。

第1号住居跡（第6・7図）

位置 調査区北西部のB2b6区で、南東方向への緩やかな傾斜地に位置している。



第6図 第1号住居跡実測図



第7図 第1号住居跡・出土遺物実測図

重複関係 北西コーナーを、第1号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平のため南・東側壁の大部分が確認することができなかったが、遺存している壁の状況から判断して、一辺が5.30m前後の方形で、主軸方向はN-36°-Wであると推測される。壁高は14cmで、各壁とも緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竪 北東壁の中央部に付設されており、焚き口から煙道部まで130cmである。壁外への掘り込みは17cmであり、煙道の立ち上がりは急である。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されており、左袖の一部は第1号方形竪穴遺構に掘り込まれている。火床面は地山面を6cmほど皿状に掘りくぼめて使用しており、火熱のため赤変硬化している。

竪土層解説

1 黒 褐 色 炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量	6 灰 褐 色 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量	7 にぶい赤褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
3 極暗 褐 色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	8 暗 赤 褐 色 焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4 暗 赤 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗 赤 褐 色 焼土粒子少量、炭化物微量
5 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量	10 暗 赤 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量

ピット 4か所。深さは62~65cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 4層に分層される。ロームブロックなどを含む人為堆積である。

土層解説

1 褐 色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	3 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	4 明 褐 色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片120点（坏類14、甕類106）、不明土製品1点の他に、混入したと考えられる縄文土器片1点、弥生土器片76点、陶器片1点、石器1点が出土している。遺物は、竈右側の北東コーナ付近から多く確認されている。3は中央部西側の覆土下層から、4は北東コーナー付近の覆土下層からそれぞれ出土している。
所見 時期は、出土土器などから6世紀初頭と考えられる。煙道部の壁外への掘り込みが浅いこともこの時期の特徴の一つと言える。

第1号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
3	土師器	坏	[16.6]	(34)	-	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	明赤褐	良好	口辺部内・外面横ナデ、内面ヘラ磨き	覆土下層	5%
4	土師器	甕	-	(18.8)	-	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、体部内面ヘラナデ、輪積み痕	覆土下層	10% PL5

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q 1	磨石	9.1	5.8	3.6	2680	石英	使用面は両側縁、長軸側両端に敲打痕有り、敲石に転用カ	覆土下層	PL5

4 近世の遺構と遺物

墓壙1基、溝跡1条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 墓壙

第1号墓壙（第8・9図）

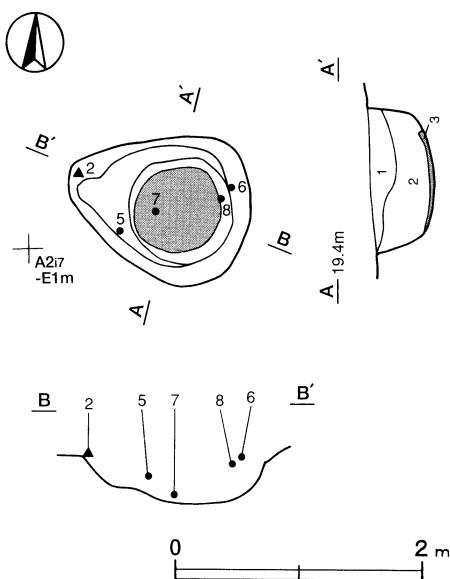
位置 調査区北西部のA2h7区で、緩やかな斜面地に位置している。

規模と形状 長径1.48m、短径1.19mの橢円形で、深さは50cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は平坦で、粘土が貼り付けられている。

覆土 3層に分層される。ロームブロックを含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

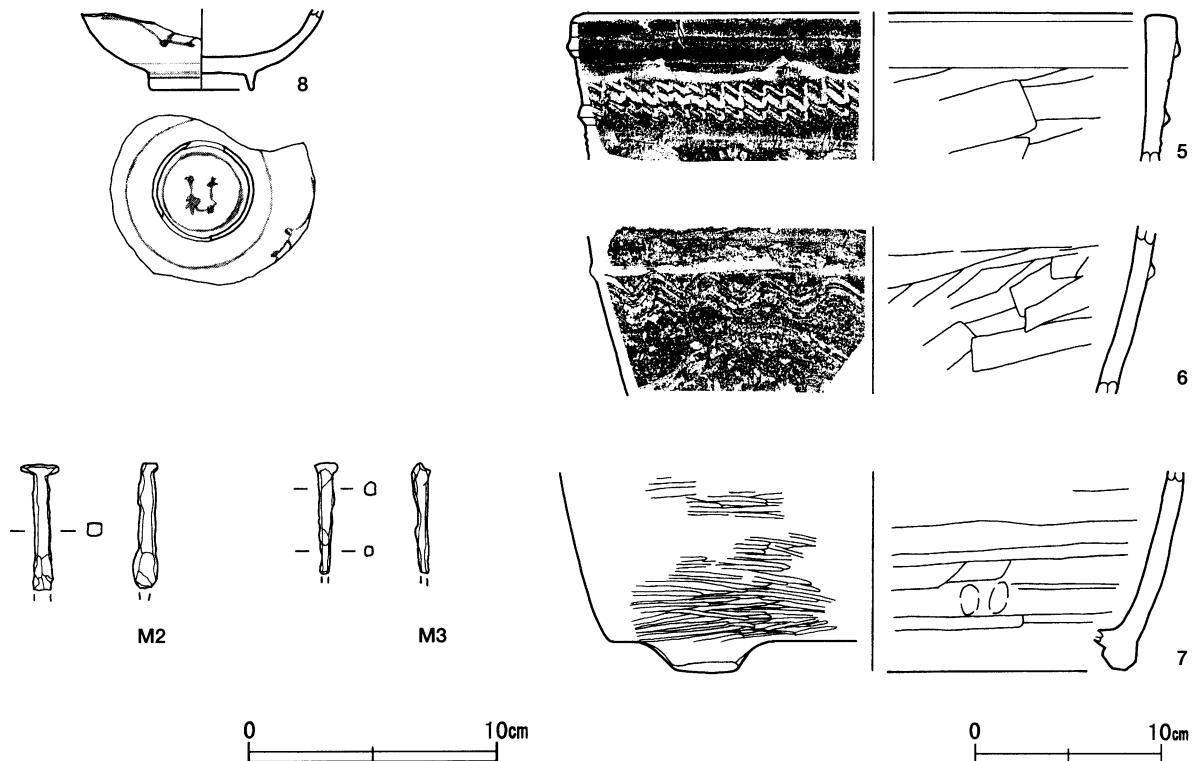
- 1 褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐灰色 粘土粒子中量、砂・細礫微量



第8図 第1号墓壙実測図

遺物出土状況 陶・磁器片11点（碗類8、小皿類2、鉢類1）、土師質土器片2点（小皿類）、瓦質土器11点（鉢類）、鉄製品3点（釘2点、不明1）、石14点が出土している。5・7は、それぞれ南寄りの覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から近世以降と考えられる。性格については、底面に粘土が貼り付けられていたことから墓壙としたが、骨片や骨粉などは確認されなかった。



第9図 第1号墓壙出土遺物実測図

第1号墓壙出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
5	瓦質土器	火鉢	[32.4]	(7.9)	-	長石・石英・雲母	暗灰	普通	口辺部に2条の隆帯貼り付け、各隆帯下部に波状文、内面ナデ	覆土下層	5%
6	瓦質土器	火鉢	-	(8.8)	-	長石・石英・雲母	暗灰	普通	1条の隆帯貼り付け、隆帯下部に波状文、内面ナデ	覆土上層	5%
7	瓦質土器	火鉢	-	(10.6)	[28.2]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ、指頭痕	覆土下層	5%
8	磁器	丸碗	-	(3.2)	4.0	砂粒	灰白	良好	外面に草文、底面に一重巻、底裏に崩れた文字銘、透明釉	覆土上層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M 2	釘	(5.0)	1.5	0.6	(6.9)	鉄	断面は方形の棒状、頭部屈曲、角釘カ	覆土上層	PL 5
M 3	釘	(4.4)	0.9	0.6	(2.6)	鉄	断面は方形の棒状、頭部屈曲鋸切が激しく頭部形状不明、角釘カ	覆土上層	PL 5

(2) 溝跡

第2号溝跡（第10・11・29図）

位置 調査区東側のA1f0～A2g3区に位置している。

規模と形状 東側は調査区域外へ延びているため、全体を確認することはできなかった。A2f3区から西方向（N-84°-W）へ直線的に6.54m延び、そこから屈曲して南西方向（N-139°-W）へ7.32mほど延びている。確認された上幅2.41～3.38m、下幅1.58～2.71m、深さ0.30～0.77mで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、断面形はU字状を呈している。

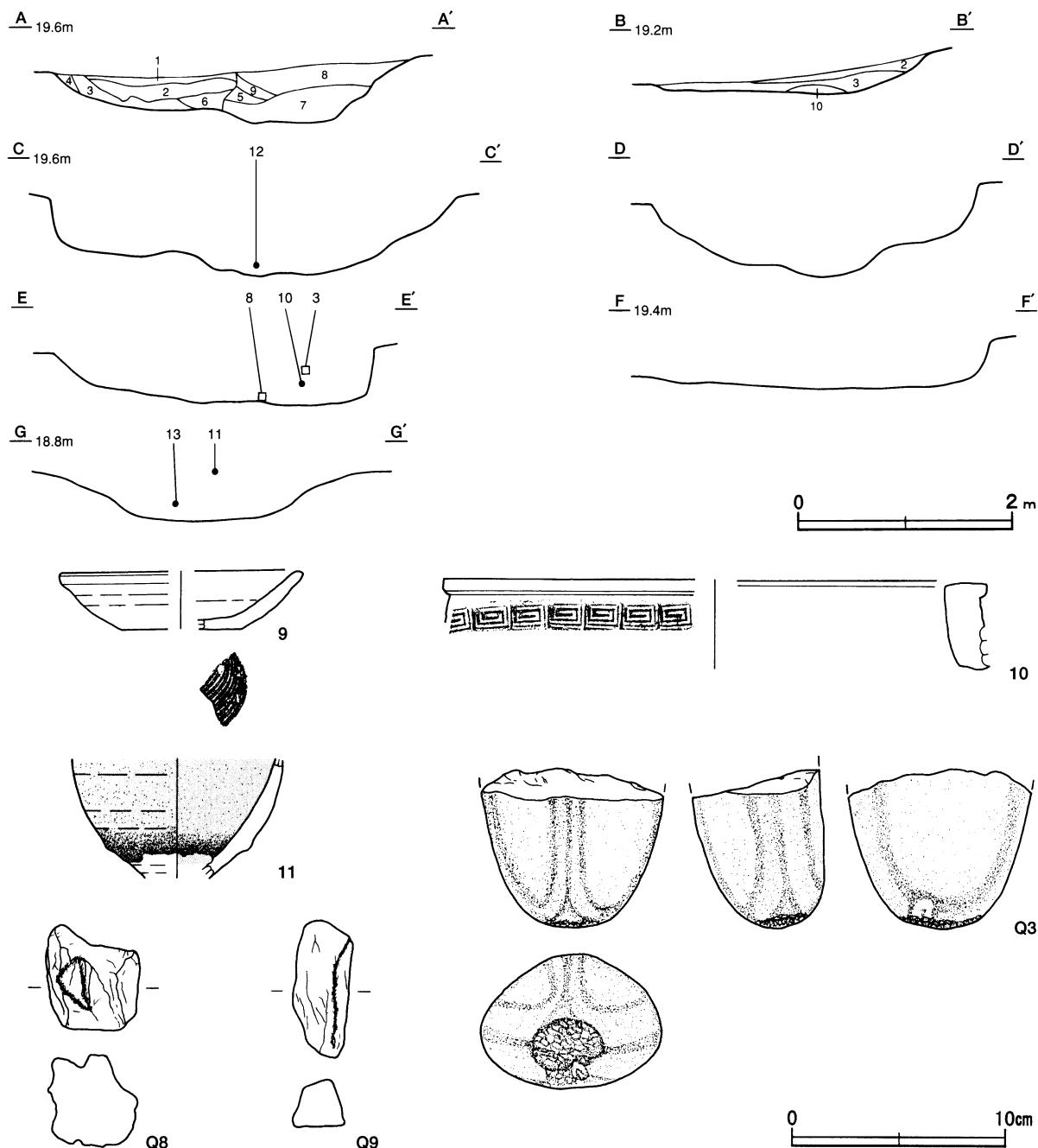
覆土 10層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含み、一部ブロック状の堆積状況を示すが自然堆積である。

土層解説

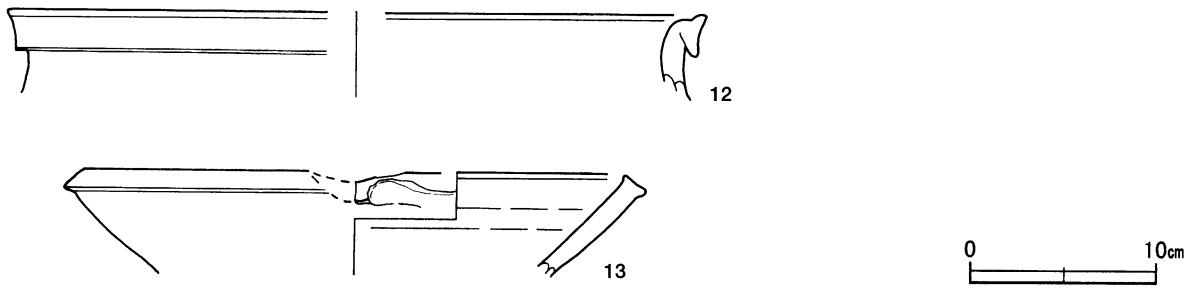
1 褐色	粘土ブロック・ローム粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量
2 明褐色	ロームブロック少量, 粘土ブロック微量	7 灰褐色	粘土粒子少量, ロームブロック微量
3 褐灰色	粘土ブロック少量	8 暗褐色	ロームブロック少量, 粘土粒子微量
4 橙色	ロームブロック少量	9 灰褐色	砂・細礫少量, ローム粒子・粘土ブロック微量
5 暗褐色	ロームブロック微量	10 褐灰色	粘土ブロック少量, 砂・細礫微量

遺物出土状況 弥生土器片 5 点 (壺類), 土師器片 7 点 (甕類), 土師質土器片 6 点 (小皿), 瓦質土器片 4 点 (鉢類) 陶器片 23 点 (皿類 11, 碗類 8, 甕類 4), 石器 1 点 (敲石), 磨 9 点が覆土中から出土している。12は東側の覆土下層から, 13は西側の覆土下層からそれぞれ出土している。10は中央部の覆土中層から出土しており, 同一個体の破片が西側の覆土下層からも出土している。

所見 時期は, 出土遺物から近世と考えられる。性格については不明である。



第10図 第2号溝跡・出土遺物実測図



第11図 第2号溝跡出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表（第10・11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
9	土師質土器	小皿	[11.4]	2.7	[5.6]	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転糸切り、体部内・外面ロクロナデ	覆土中	30%
10	瓦質土器	火鉢	[25.3]	(4.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	暗灰黄	普通	口辺部外面雷文様のスタンプ文、口唇部・口辺部内面ナデ	覆土下層	5%
11	陶器	天目茶碗	-	(5.5)	-	砂粒	灰褐・灰白	良好	内面、外面中位鉄釉、付け掛け、内面低位細かい貫入	覆土下層	20%瀬戸・美濃系
12	陶器	甕	[36.8]	(4.5)	-	長石・石英	灰黄褐	普通	口辺部横ナデ	覆土中層	5%常滑産
13	陶器	鉢類	[29.0]	(5.5)	-	長石・石英	橙	普通	片口	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 3	敲石	(7.4)	8.6	6.2	(471.0)	砂岩	長軸側の一端に敲打痕有り、磨石からの転用カ	覆土上層	
Q 8	火打石	4.9	4.4	4.2	101.2	瑪瑙	一部の稜が磨滅及び剥離	底面	
Q 9	火打石	6.3	2.7	2.2	51.9	瑪瑙	一部の稜が磨滅	覆土中	

5 その他の遺構と遺物

出土遺物などから時期及び性格を判断することができなかった方形堅穴遺構3基、円形周溝状遺構1基、溝跡3条、柵跡1列、土坑49基、ピット群3か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 方形堅穴遺構

第1号方形堅穴遺構（第12図）

位置 調査区北西部のB2b5区で、南東へ緩やかに傾斜した斜面地に位置している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.39m、短軸2.05mの隅丸長方形で、深さは34cmである。主軸方向はN-22°-Eで、壁は外傾して立ち上がっているが、西側壁は上部でさらに外傾している。底面はほぼ平坦で、壁溝が全周している。

覆土 6層に分層される。ロームブロックや炭化粒子を含む人為堆積である。

土層解説

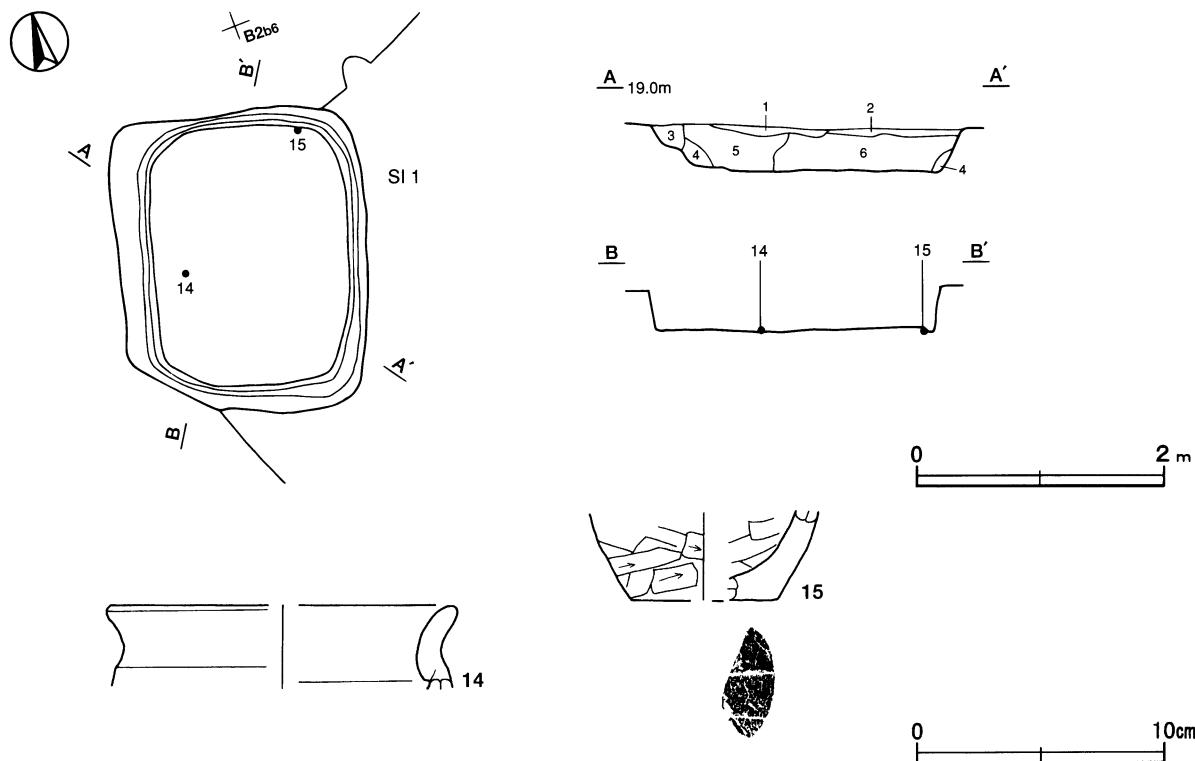
- | | |
|--------|------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |

- | | |
|-------|------------|
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 6 褐色 | ローム大ブロック微量 |

遺物出土状況 繩文土器片1点、弥生土器片27点（壺類）、土師器片31点（壺類5、甕類26）が出土している。

14は西側覆土下層から、15は北側壁近くの床面からそれぞれ出土している。

所見 遺構に伴う遺物が出土していないが、古墳時代後期の住居跡を掘り込んでいることから時期はそれ以降と考えられる。性格は不明である。



第12図 第1号方形堅穴遺構・出土遺物実測図

第1号方形堅穴遺構出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土師器	甕	[14.0]	(3.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	良好	口辺部内・外面横ナデ	覆土下層	5%
15	土師器	甕	-	(3.5)	[6.0]	長石・石英・雲母	橙	良好	体部外面下端ヘラ削り, 内面ヘラナデ, 底部木葉痕	床面	5%

第2号方形堅穴遺構（第13図）

位置 調査区北西部のA2j4区で、南東へ緩やかに傾斜した斜面地に位置している。

重複関係 第3号方形堅穴遺構の一部を掘り込み、第21号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.74m、短軸1.63mの隅丸長方形で、深さは50cmである。主軸方向はN-20°-Eで、壁は外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、壁溝が全周している。

覆土 4層に分層される。ロームブロックや炭化粒子を含む人為堆積である。

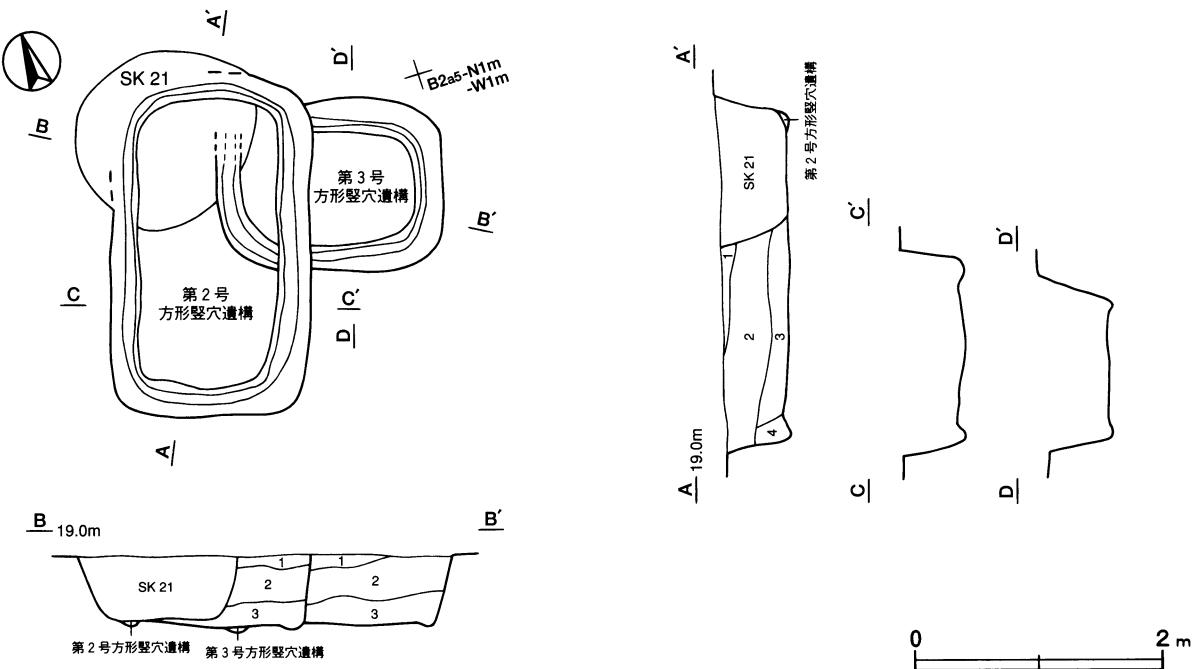
土層解説

- | | |
|-------|--------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 |

- | | |
|-------|-------------------|
| 3 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 弥生土器片3点（壺類）、土師器片5点（壺類4、甕類1）が出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 遺構に伴う遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第13図 第2・3号方形堅穴遺構実測図

第3号方形堅穴遺構（第13図）

位置 調査区北西部のA2j4区で、南東へ緩やかに傾斜した斜面地に位置している。

重複関係 第2号方形堅穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.85m、短軸1.40mの隅丸長方形で、深さは52cmである。主軸方向はN-73°-Wで、壁は外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、北側コーナー部を除いて壁溝が周回している。

覆土 3層に分層される。ロームブロックや炭化粒子を含む人為堆積である。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック微量

3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。

(2) 円形周溝状遺構

第1号円形周溝状遺構（第14図）

位置 調査区南東部のC3j7区で、南東へ緩やかに傾斜した斜面地に位置している。

規模と形状 西側は調査区域外に延びており、南側は削平を受けているため全体を確認することはできなかった。長径5.57m、短径5.19mのほぼ円形と推測される。周溝の上幅0.27~0.43m、下幅0.09~0.20m、深さ0.07~0.18mが確認できた。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面はほぼ平坦で、断面形はU字状を呈している。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

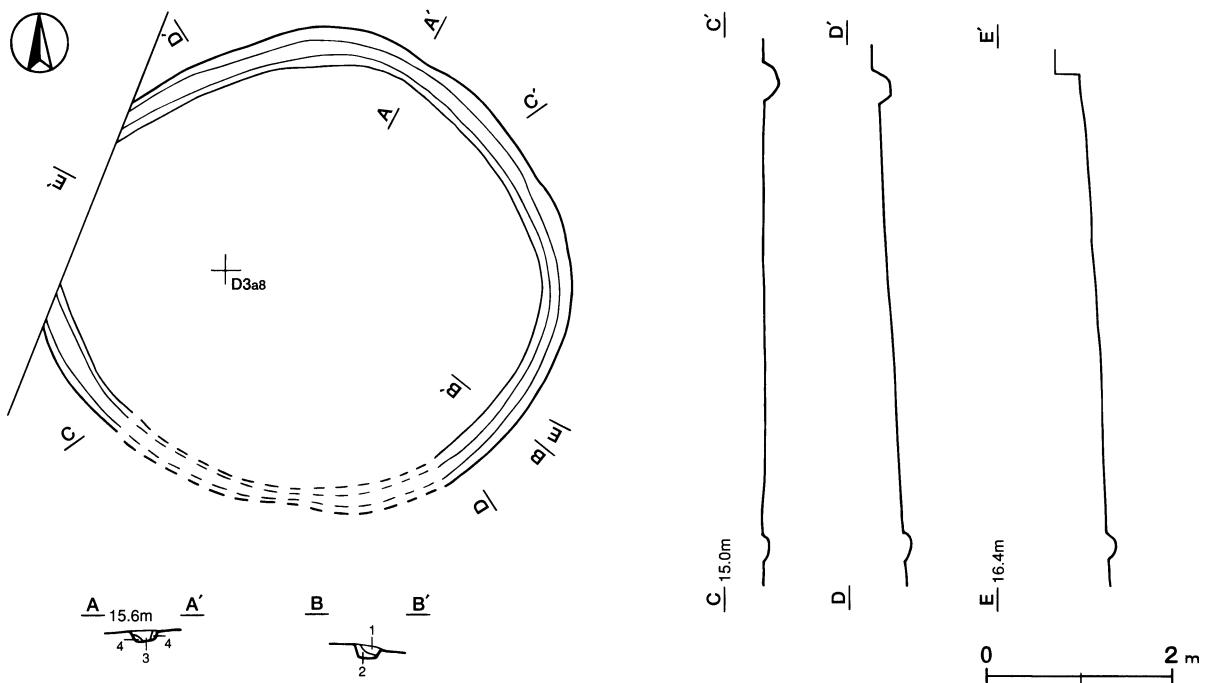
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子中量、砂粒微量

3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂粒微量
4 黒褐色 ローム粒子・砂粒微量

遺物出土状況 弥生土器片4点（壺類），土師器片2点（壺1，甕1）が出土しているが，いずれも細片であるため図示することはできない。

所見 遺構に伴う遺物が出土していないため，時期及び性格は不明である。



第14図 第1号円形周溝状遺構実測図

(3) 溝跡

第4号溝跡（第15・16図）

位置 調査区中央部のB3i3～B3i5区に位置している。

規模と形状 東側は調査区域外へ伸びているため遺構全体を確認することはできなかったが，B3i5区から西方向（N-82°-W）へほぼ直線的に伸びている。確認された長さは10.80mほどで，上幅0.69～1.50m，下幅0.34～1.25m，深さ0.03～0.23mである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており，底面は平坦である。

覆土 6層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含んでいるが，レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

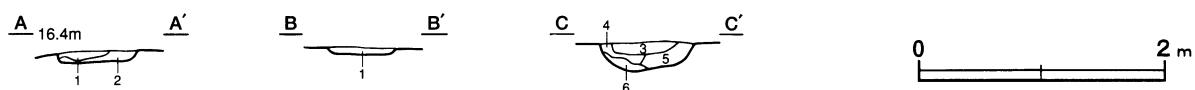
土層解説

1 黒色	ロームブロック微量
2 暗褐色	ローム粒子中量
3 極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量

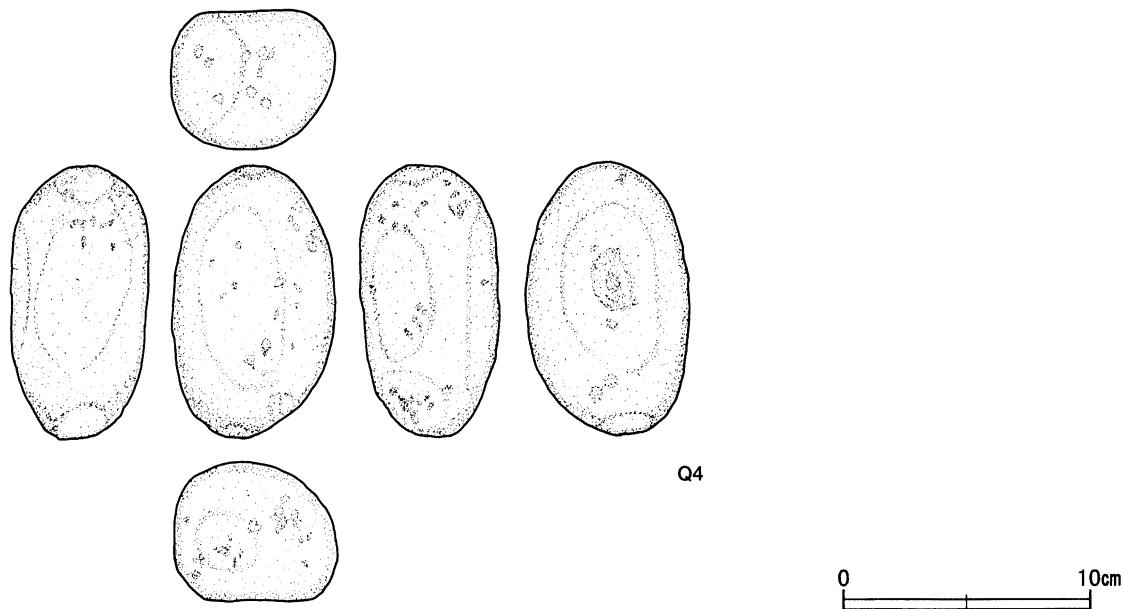
4 暗褐色	ローム粒子少量
5 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
6 褐色	ローム粒子中量，炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片19点（壺類），石器1点（敲石）が出土している。

所見 遺構に伴う遺物が出土していないため，時期及び性格は不明である。



第15図 第4号溝跡実測図



第16図 第4号溝跡出土遺物実測図

第4号溝跡出土遺物観察表（第16図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 4	磨石	10.7	6.6	5.5	230.0	安山岩	使用面は両側縁、長軸側両端に敲打痕有り、敲石に転用カ	覆土中	PL 5

第5号溝跡（第17図）

位置 調査区南東部のC3g0, C3h0及びC4g1区に位置している。

規模と形状 北東側は調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、C4g1区から南西方向（N-133°-W）へ直線的に延びている。確認された長さは4.55mほどで、上幅0.76~1.20m、下幅0.36~0.60m、深さ0.56~0.68mである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

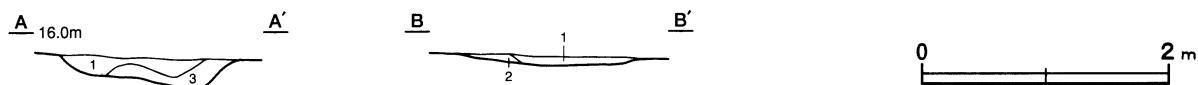
覆土 3層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含んでいるが、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
2 褐　色 ロームブロック少量、粘土ブロック微量

3 褐　色 ロームブロック・粘土ブロック微量

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第17図 第5号溝跡実測図

第6号溝跡（第18図）

位置 調査区南東側のD3b6~D3e9区で、南東へ緩やかに傾斜した斜面地に位置している。

規模と形状 北西側及び南東側は調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、D3b6

区から南東方向（N-45°-E）へ直線的に延びている。確認された長さは15.80mほどで、上幅0.16~0.90m、下幅0.10~0.42m、深さ0.22~0.44mである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

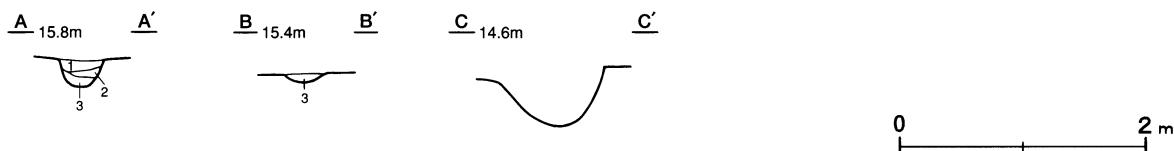
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量

3 極暗褐色 ローム粒子微量

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第18図 第6号溝跡実測図

(4) 柵跡

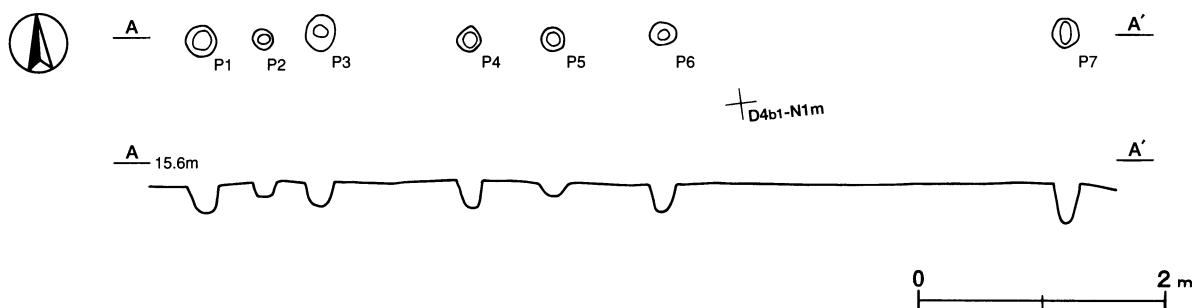
第1号柵跡（第19図）

位置 調査区南東部のD3a9~D4a1区に位置している。

規模と形状 軸方向はN-84°-Wで、柱間寸法は東側からそれぞれ3.27m, 0.89m, 0.68m, 1.22m, 0.48m, 0.49mである。

柱穴 長径15~25cmの円形で、深さは13~32cmである。

所見 いずれの柱穴からも遺物が出土していないため、時期は不明である。7か所の柱穴が直線的に確認されたが、付近の柱穴との配置的な関連性や掘立柱建物跡などの規則性を見つけることができなかったため、柵跡として扱った。



第19図 第1号柵跡実測図

(5) 土坑

ここでは、時期及び性格が不明な土坑について実測図と一覧表で示し、併せて土層解説と遺物の実測図を記載する。

第1号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック微量

第2号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量
2 極暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
3 褐 色 ロームブロック少量

第46号土坑土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子・粘土ブロック・赤色粒子微量
- 4 黒 色 粘土粒子少量、ローム粒子・砂粒・赤色粒子微量
- 5 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 7 黒 褐 色 粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量
- 8 暗 褐 色 粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量

第47号土坑土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量

第48号土坑土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・赤色粒子微量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子少量、赤色粒子微量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子・砂粒微量
- 5 極暗 褐 色 ローム粒子・砂粒微量
- 6 暗 褐 色 ローム粒子少量、砂粒・赤色粒子微量

第49号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・粘土ブロック・砂粒微量
- 2 暗 褐 色 粘土ブロック中量、ローム粒子・砂粒少量
- 3 暗 褐 色 粘土ブロック・砂粒少量、ローム粒子微量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子・粘土ブロック・砂粒微量

第50号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐 色 ローム粒子少量、砂粒・赤色粒子微量

第51号土坑土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子・砂粒微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・砂粒微量
- 3 極暗 褐 色 ローム粒子・粘土ブロック・砂粒微量
- 4 にぶい黄褐色 ローム粒子中量、砂粒少量、粘土粒子・赤色粒子微量
- 5 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 6 暗 褐 色 ローム粒子少量、粘土粒子微量

第52号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子中量、粘土ブロック微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 3 黒 色 ローム粒子微量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子少量、砂粒・赤色粒子微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子少量、粘土ブロック微量
- 6 にぶい褐色 ローム粒子中量、粘土ブロック・砂粒微量
- 7 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 8 褐 色 ローム粒子中量、砂粒微量

第53号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・赤色粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量、赤色粒子微量
- 3 褐 色 ローム粒子中量
- 4 褐 色 ロームブロック微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子少量、ロームブロック・赤色粒子微量
- 6 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 7 にぶい黄色 ローム粒子・粘土粒子・粘土ブロック微量

第54号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・赤色粒子微量
- 2 極暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 褐 色 ローム粒子中量、砂粒少量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子・砂粒少量
- 5 極暗 褐 色 ローム粒子少量、粘土ブロック・砂粒微量
- 6 褐 色 ローム粒子中量、砂粒微量
- 7 褐 色 ローム粒子・粘土粒子中量、砂粒少量
- 8 にぶい黄褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、粘土ブロック・砂粒微量

第55号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量

第56号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 極暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第58号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・砂粒微量
- 2 極暗 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量

第59号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量
- 3 灰 褐 色 ロームブロック微量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子微量

第60号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 3 極暗 褐 色 ロームブロック少量
- 4 黑 褐 色 ロームブロック中量、炭化物微量
- 5 黑 褐 色 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量
- 6 暗 褐 色 ローム粒子少量

第61号土坑土層解説

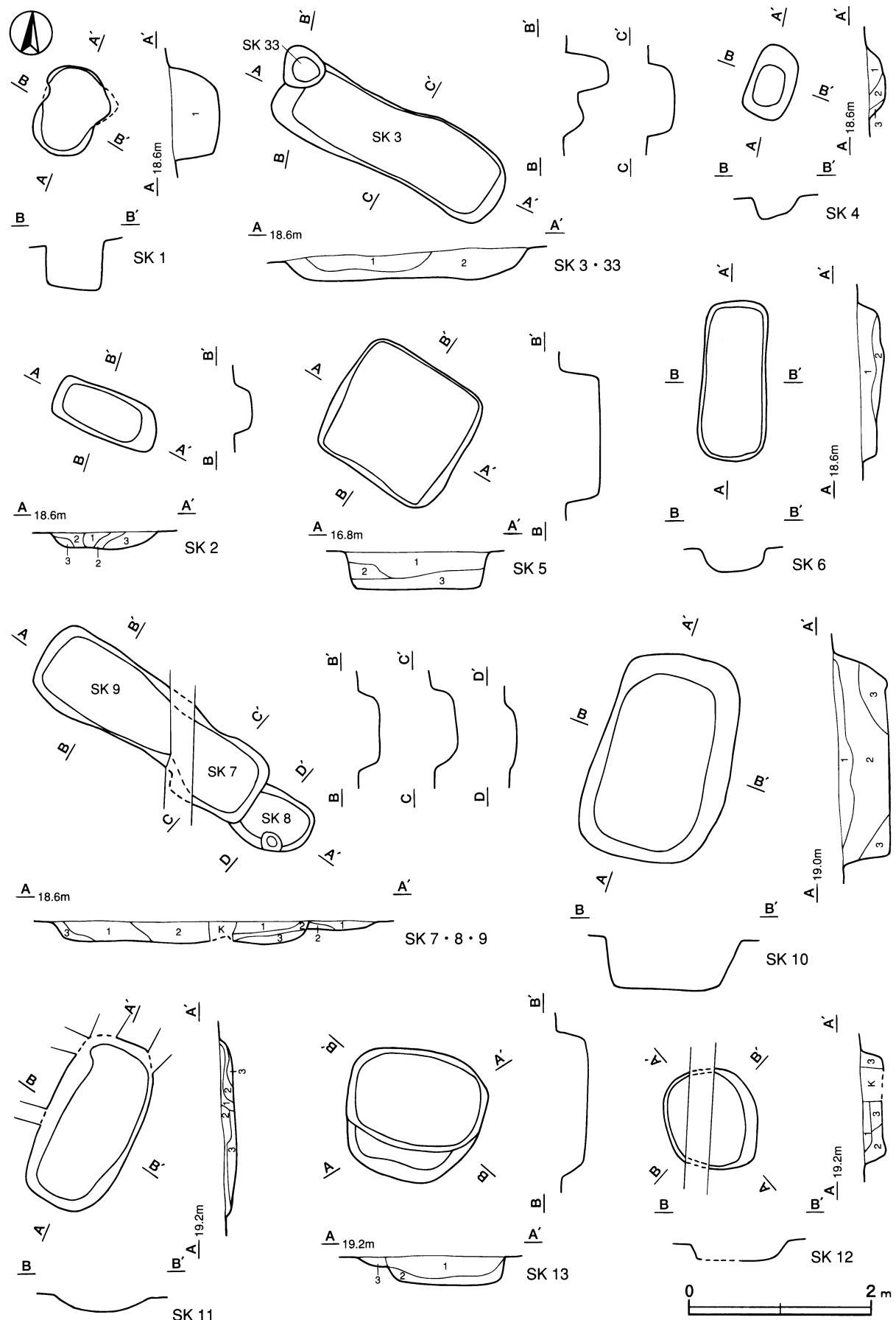
- 1 黒 色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 3 極暗 褐 色 ロームブロック微量
- 4 黑 褐 色 ローム粒子微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子中量、砂粒微量
- 6 褐 色 ローム粒子中量
- 7 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 8 暗 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子・粘土ブロック微量
- 9 暗 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量

第66号土坑土層解説

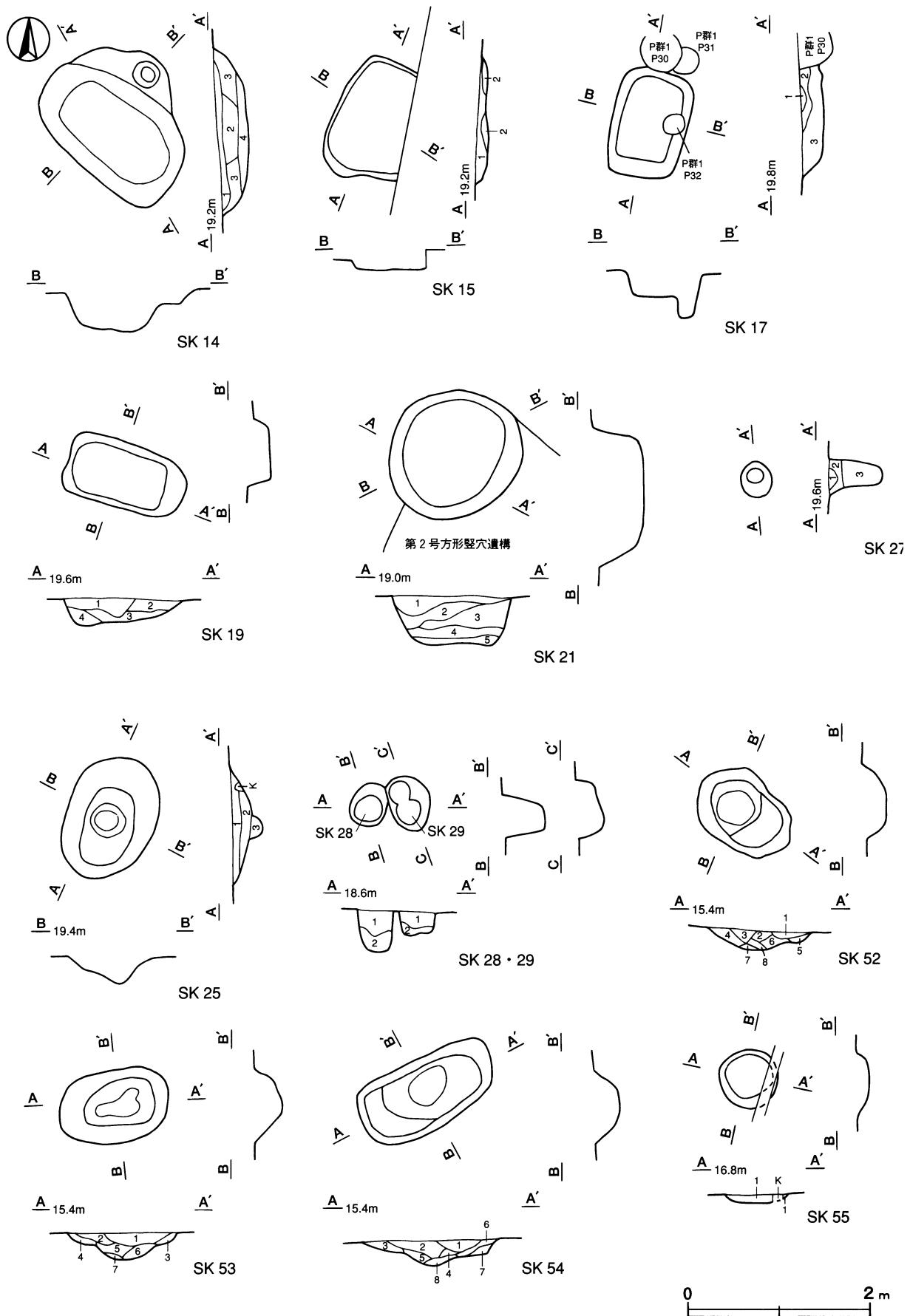
- 1 黒 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 4 極暗 褐 色 ローム粒子微量
- 5 褐 色 ローム粒子少量、砂粒微量

第68号土坑土層解説

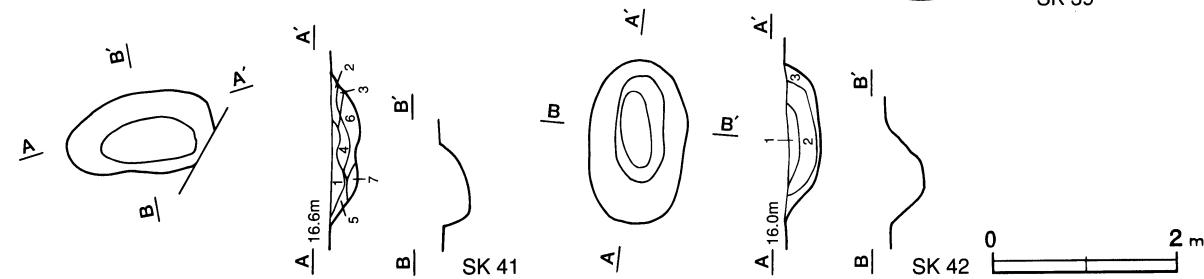
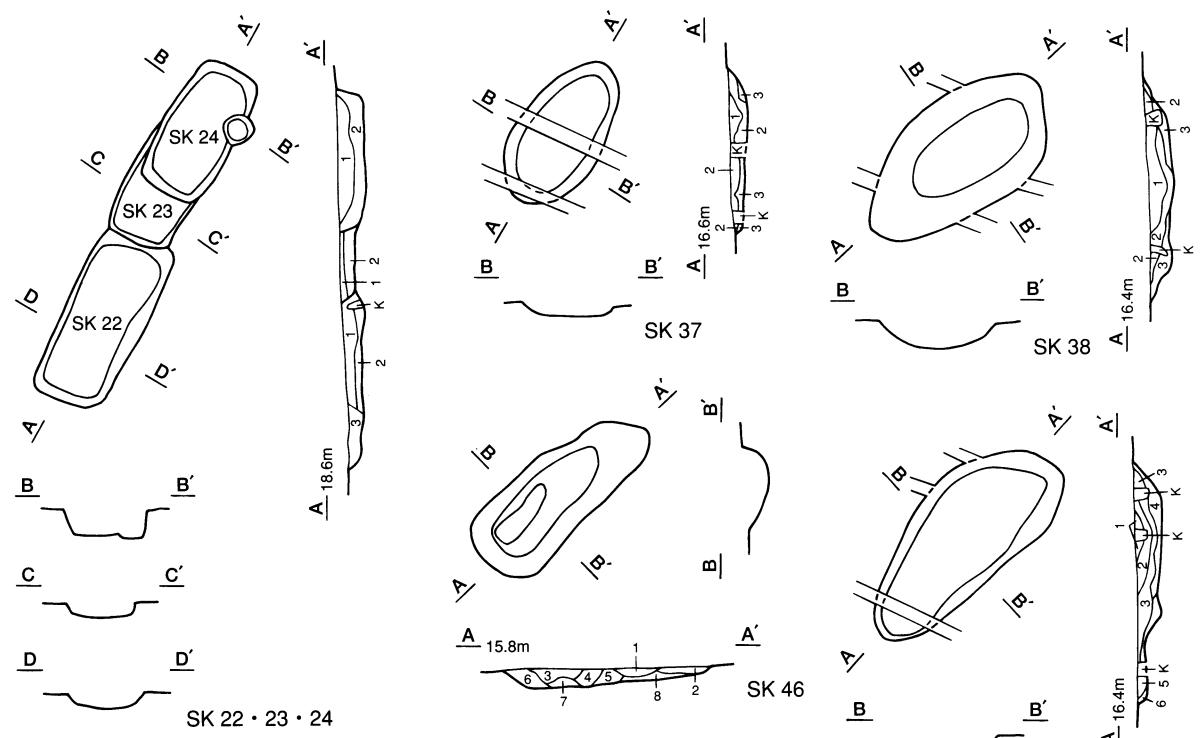
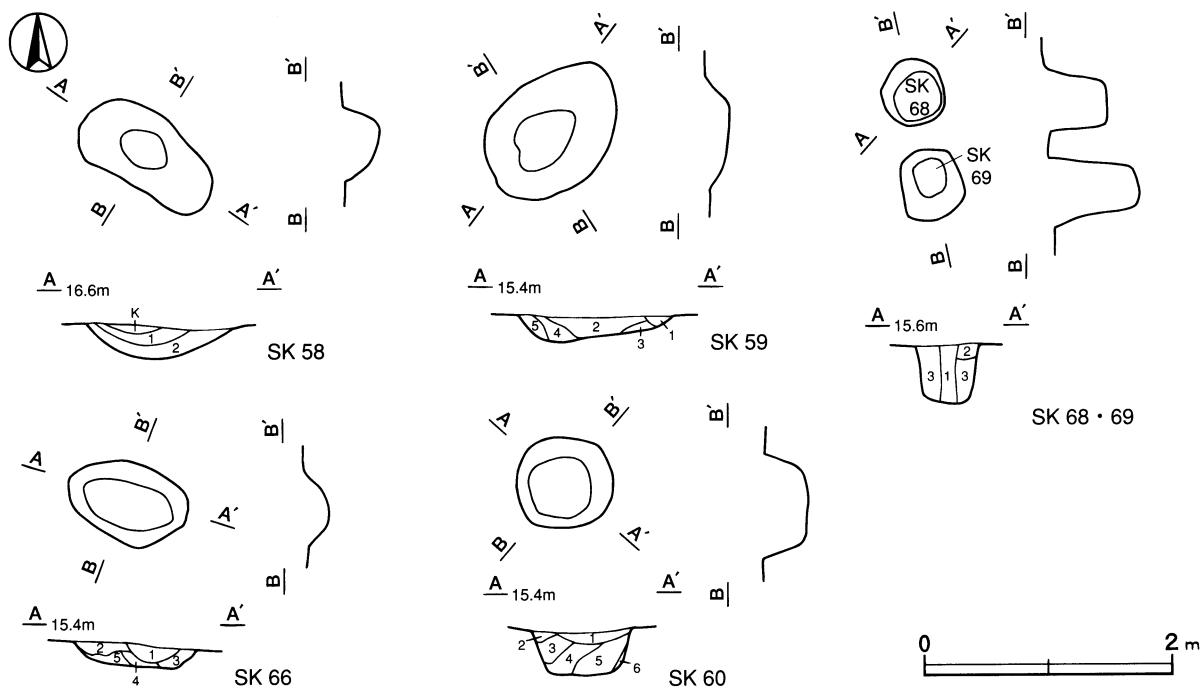
- 1 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 橙 色 鹿沼バミス多量
- 3 極暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量



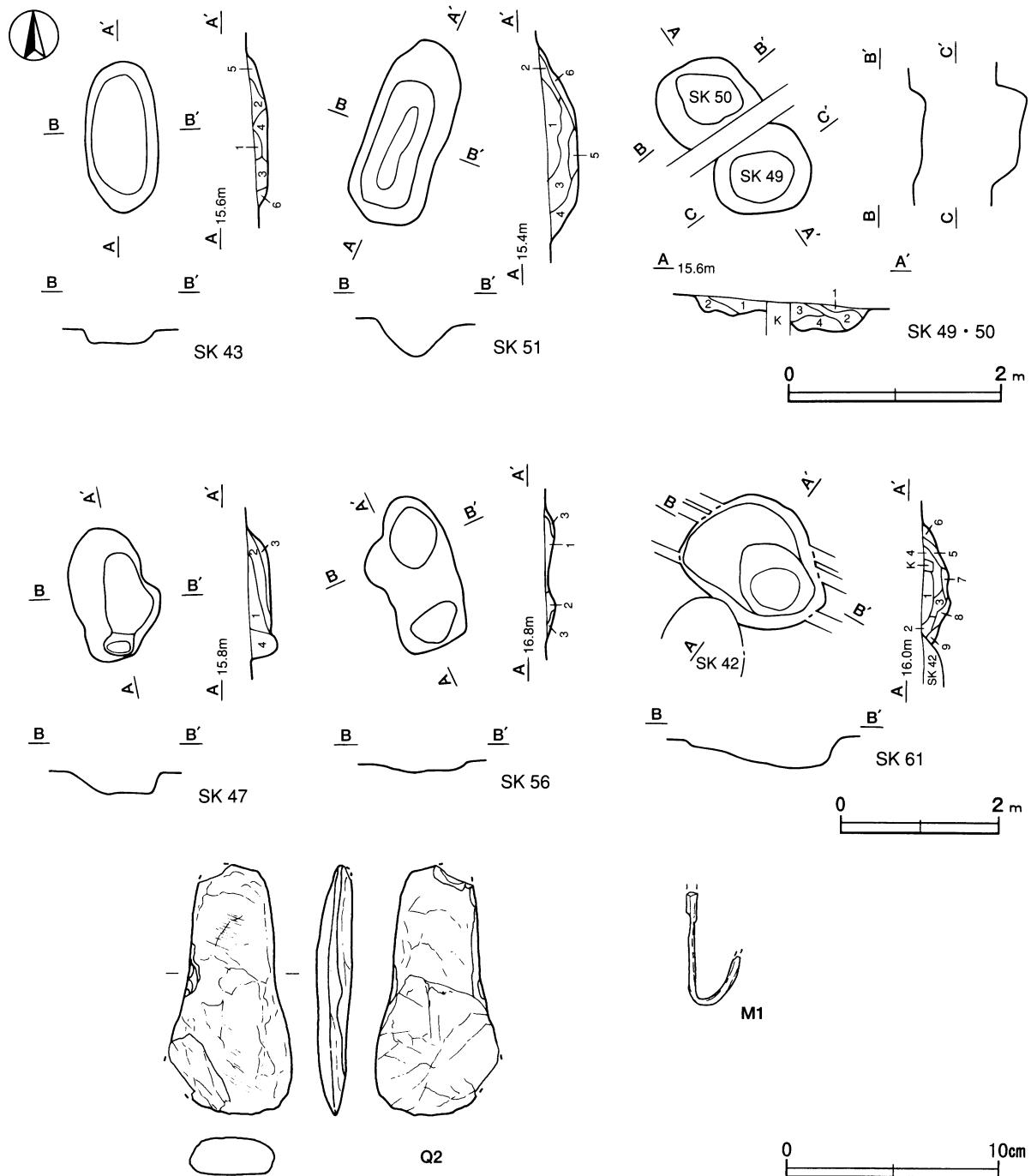
第20図 土坑実測図（1）



第21図 土坑実測図 (2)



第22図 土坑実測図 (3)



第23図 土坑、第24・69号土坑出土遺物実測図

第24号土坑出土遺物観察表（第23図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	打製石斧	11.7	5.8	1.7	(131.2)	粘板岩	撥形、自然面を残す	覆土下層	PL 5

第69号土坑出土遺物観察表（第23図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	不明	(5.2)	0.5	0.2	(3.1)	鉄	錆化が激しく不明	覆土中	

(6) ピット群

第1号ピット群（第29図）

調査区北西側のA2g6～A2g8区、A2h6～A2h8区及びA2i7区から36か所のピットが検出された。平面形は径16～64cmほどの円形または楕円形で、深さは12～68cmである。P14の覆土下層からは土師質土器（小皿）、P15の覆土上層からは磁器（徳利）がそれぞれ出土しており、その他のピット群からは弥生土器片2点（壺類）、土師器片5点（甕類）、須恵器片1点（甕類）、土師質土器片3点（小皿1、土鍋類2）が出土しているがいずれも細片である。時期を決定する遺物が出土していないため、時期は不明である。ピットの配置に規則性を見つけることができないため、ピット群として扱った。以下、各柱穴の一覧表を記載する。

第2号ピット群（第29図）

調査区中央部のC3b5～C3b6区、C3c5～C3c7区及びC3d5～C3d7区の範囲で、16か所のピットが検出された。平面形は径17～52cmほどの円形または楕円形で、深さは6～34cmである。検出されたピットからは遺物が出土していないため、時期は不明である。ピットの配置に規則性を見つけることができないため、ピット群として扱った。以下、各柱穴の一覧表を記載する。

第3号ピット群（第29図）

調査区南東側のC3j9区、D3a7～D3a0区、D3b6～D3b0区及びD3c0、D4a1区から23か所のピットが検出された。平面形は径17～29cmほどの円形または楕円形で、深さは14～62cmである。P3の覆土上層から土師質土器（小皿）が1点出土しているが、他のピットからは遺物は出土していないため時期は不明である。ピットの配置に規則性を見つけることができないため、ピット群として扱った。以下、各柱穴の一覧表を記載する。

第1号ピット群ピット計測表

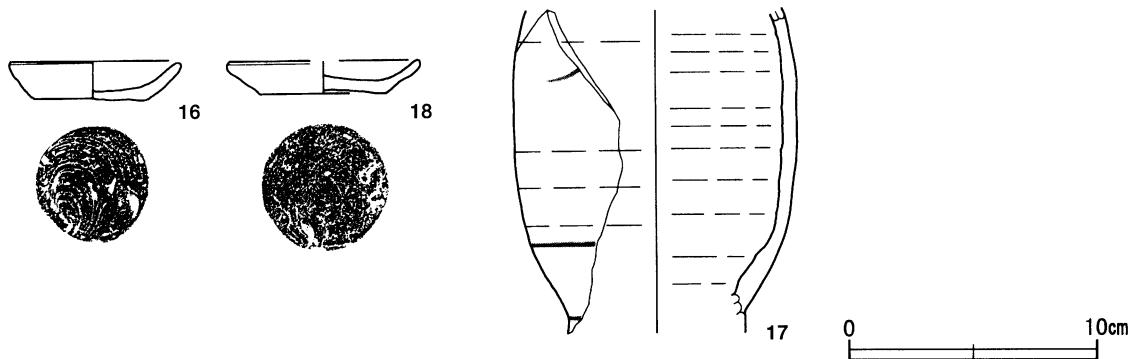
番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	40	37	30	P 10	21	21	30	P 19	50	37	41	P 28	25	25	49
P 2	45	39	48	P 11	42	37	37	P 20	47	(36.0)	25	P 29	(26.0)	24	28
P 3	55	50	39	P 12	28	(26.0)	32	P 21	25	25	34	P 30	46	43	39
P 4	64	44	43	P 13	49	41	42	P 22	28	26	35	P 31	30	(20.0)	12
P 5	31	23	30	P 14	50	(26.0)	48	P 23	43	35	43	P 32	25	23	46
P 6	45	34	40	P 15	35	25	68	P 24	26	26	19	P 33	40	36	59
P 7	21	19	29	P 16	29	27	19	P 25	27	27	58	P 34	38	34	52
P 8	41	37	61	P 17	33	26	58	P 26	35	25	38	P 35	25	25	35
P 9	35	(16.0)	42	P 18	50	42	60	P 27	38	34	40	P 36	25	24	42

第2号ピット群ピット計測表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	34	32	14	P 5	24	23	16	P 9	23	20	8	P 13	40	30	34
P 2	34	32	9	P 6	44	34	40	P 10	20	18	14	P 14	34.0	17	9
P 3	(18.0)	20	6	P 7	40	28.0	14	P 11	52	30	7	P 15	24	22	10
P 4	40	28.0	16	P 8	32	30	15	P 12	30	30	20	P 16	24	21	23

第3号ピット群ピット計測表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	22	18	14	P 7	20	17	30	P 13	18	17	37	P 19	21	19	24
P 2	19	17	33	P 8	29	23	34	P 14	26	24	38	P 20	19	18	21
P 3	23	19	29	P 9	25	22	44	P 15	21	19	32	P 21	24	21	29
P 4	29	23	31	P 10	27	23	32	P 16	24	21	21	P 22	26	23	29
P 5	27	24	33	P 11	20	17.0	17	P 17	20	18	38	P 23	27	24	26
P 6	20	18	20	P 12	23	20	29	P 18	26	25	62				



第24図 第1・3号ピット群出土遺物実測図

第1号ピット群出土遺物観察表（第24図）

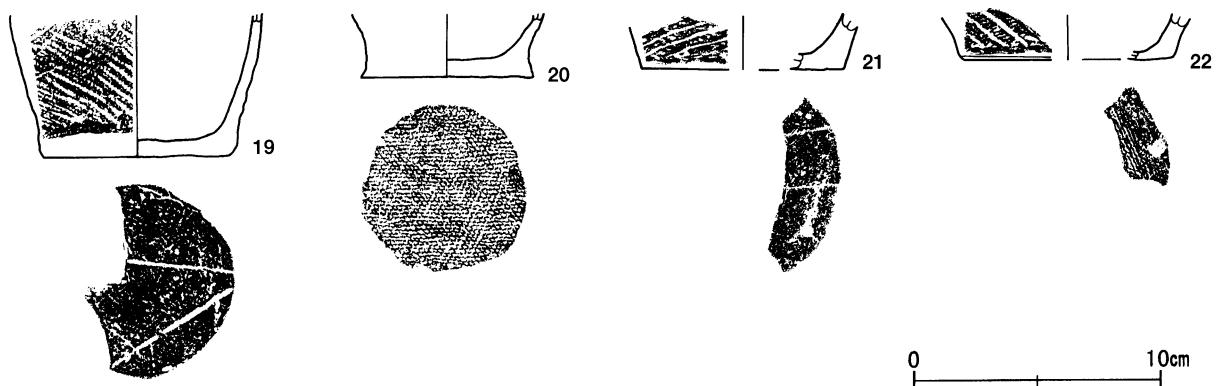
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
16	土師質土器	小皿	6.9	1.5	4.6	砂粒, 赤色粒子, 黒色粒子	橙	普通	底部回転糸切り, 体部内・外面ロクロナデ	覆土上層	100% PL 4
17	磁器	徳利	-	(12.9)	-	砂粒, 赤色粒子	灰白・にぶい橙	良好	体部下端に圈, 草文	覆土上層	10%

第3号ピット群出土遺物観察表（第24図）

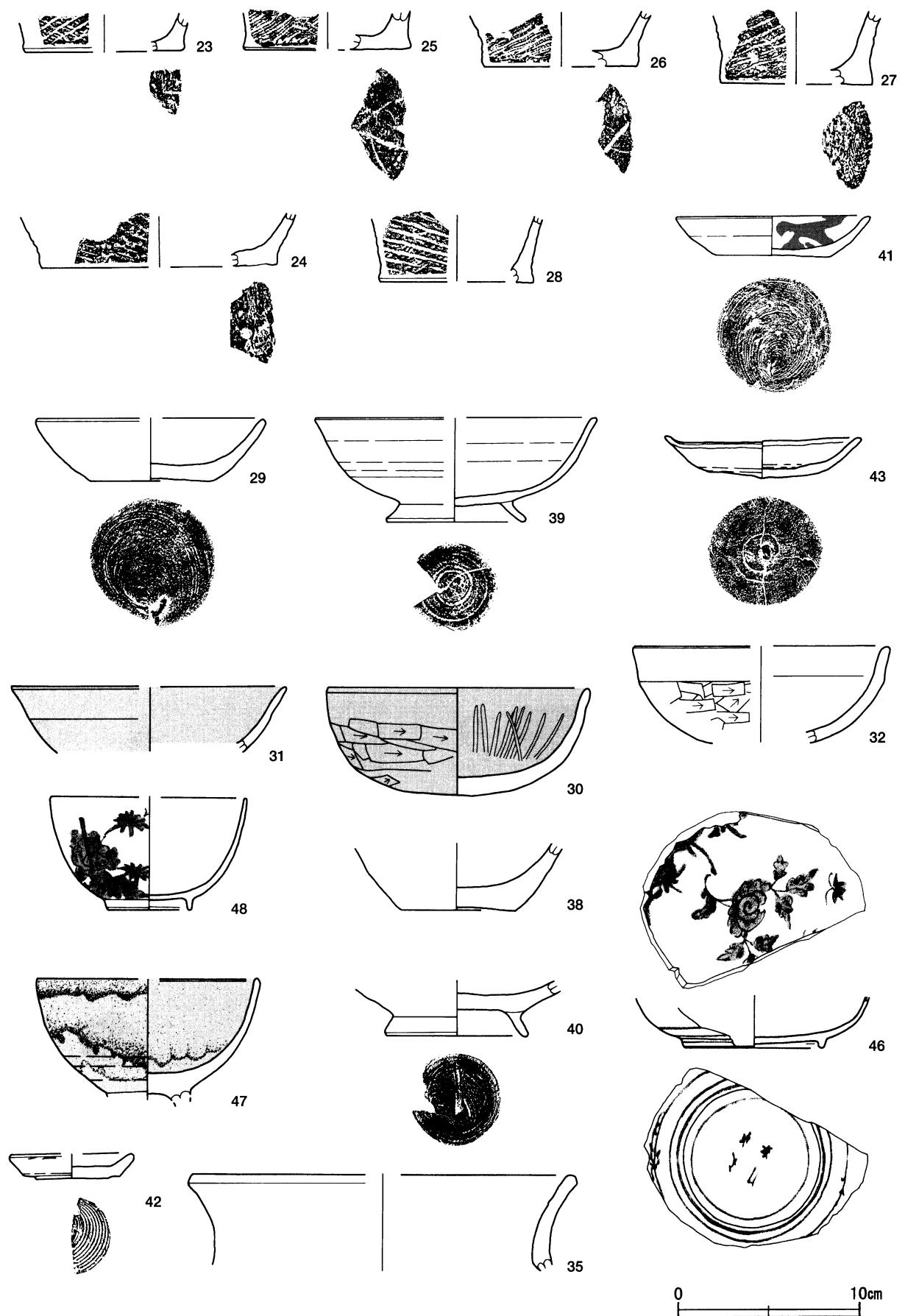
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
18	土師質土器	小皿	[7.8]	1.3	5.2	砂粒, 赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り, 体部内・外面ロクロナデ	覆土上層	80% PL 4

(7) 遺構外出土遺物（第25～28図）

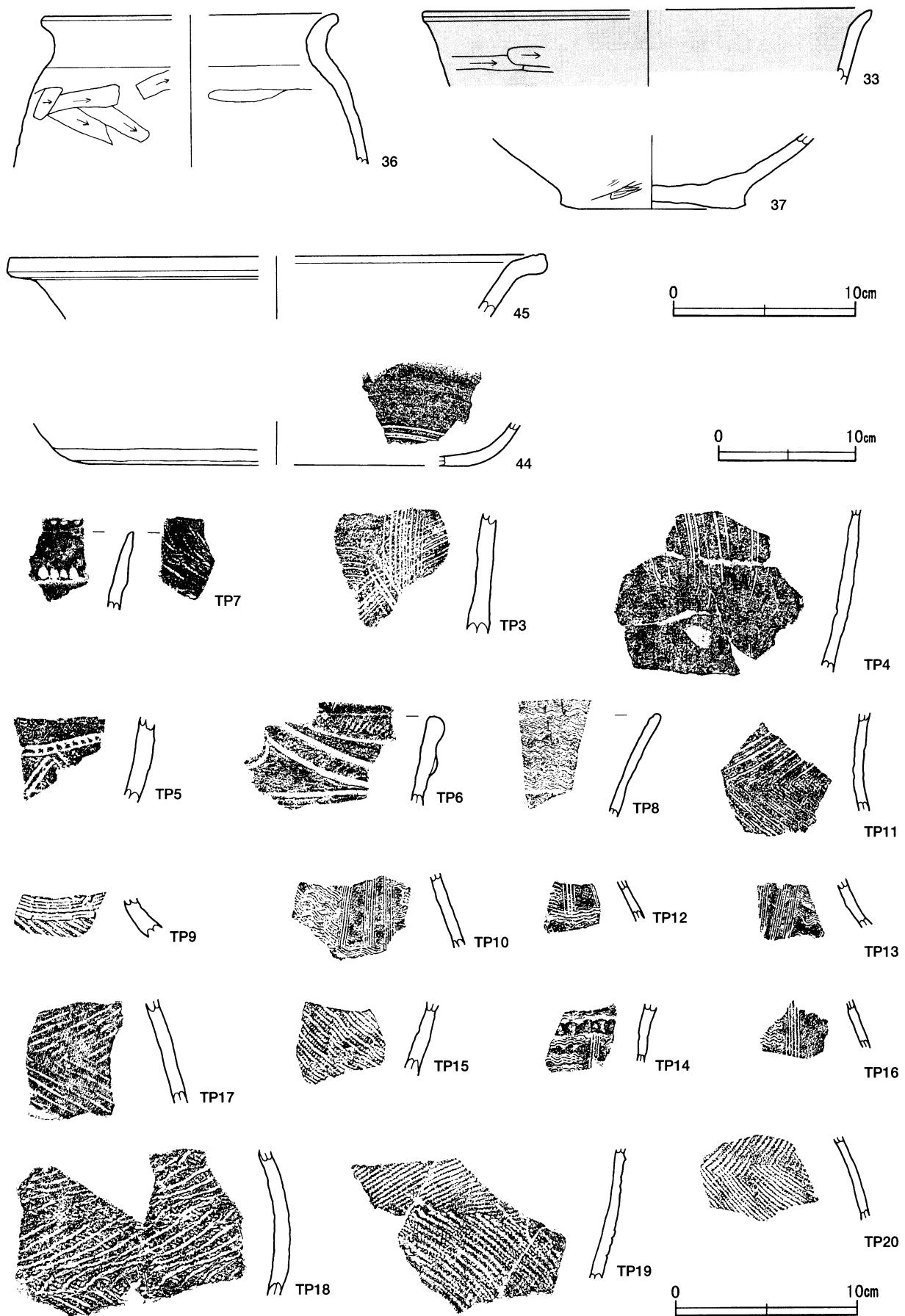
当遺跡から出土した遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表で記載する。



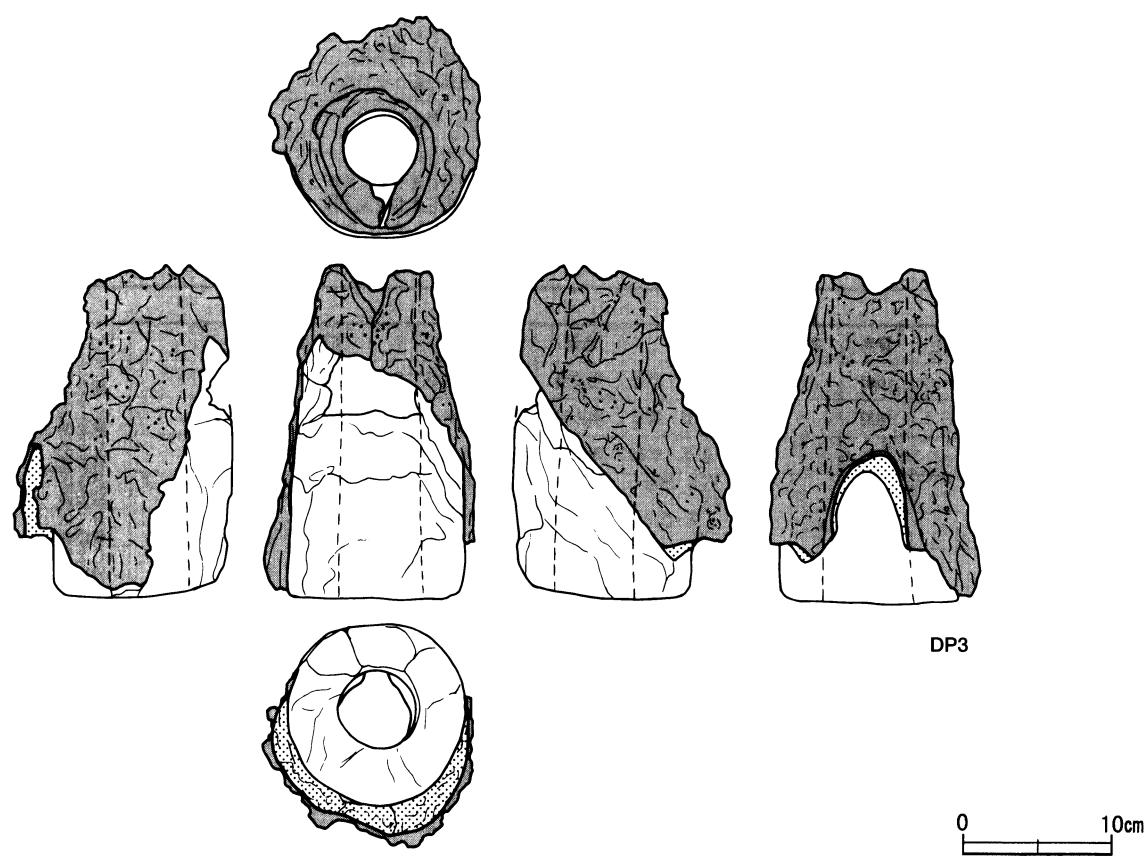
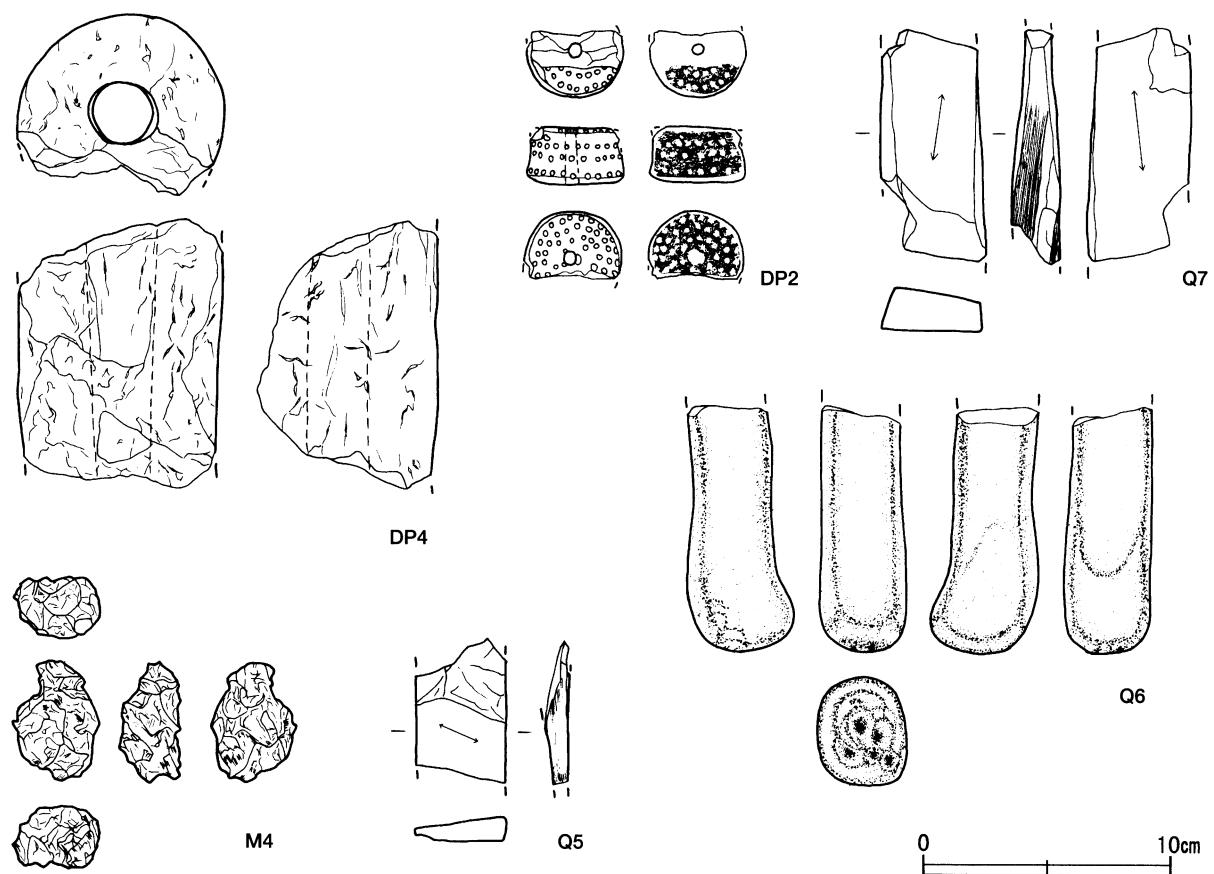
第25図 遺構外出土遺物実測図（1）



第26図 遺構外出土遺物実測図（2）



第27図 遺構外出土遺物実測図（3）



第28図 遺構外出土遺物実測図（4）

番号	位置	長軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
7	B 2 d5	N-60°-W	[正方形]	[0.90]×0.85	25	外傾	平坦	自然	土師器・須恵器	本跡→SK 9
8	B 2 d5	N-63°-W	[楕円形]	(0.73)×0.66	11	緩斜	平坦	自然	—	本跡→SK 7
9	B 2 c5	N-59°-W	[長方形]	(1.75)×0.91	24	外傾	平坦	人為	—	SK 7→本跡
10	B 2 a6	N-15°-E	隅丸長方形	2.19×1.50	53	外傾	平坦	自然	弥生土器・土師器・陶器	
11	A 2 j 6	N-28°-E	隅丸長方形	1.98×1.02	17	緩斜	平坦	人為	—	
12	A 2 j 5	—	円形	1.09×1.01	21	外傾	平坦	人為	—	
13	A 2 j 6	N-76°-W	不正方形	1.51×1.45	32	外傾	平坦	人為	陶器	
14	A 2 j 5	N-42°-W	不整長方形	1.78×1.41	45	外傾	平坦	自然	—	
15	A 2 j 7	N-25°-E	[長方形]	1.36×(0.73)	13	外傾	平坦	人為	—	
17	A 2 g7	N-9°-E	隅丸長方形	1.18×0.84	45	外傾	平坦	人為	—	本跡→SK16
19	A 2 h5	N-65°-W	隅丸長方形	1.33×0.71	46	外傾	平坦	人為	—	
21	A 2 j 4	N-27°-E	円形	1.45×1.37	52	外傾	平坦	人為	弥生土器・土師質土器	SK30→本跡
22	B 2 c3	N-22°-E	長方形	1.93×0.88	21	外傾	平坦	自然	—	本跡→SK23
23	B 2 c3	N-29°-E	[長方形]	(1.32)×0.79	17	外傾	平坦	自然	—	SK22→本跡→SK24
24	B 2 c4	N-29°-E	長方形	1.52×0.80	29	外傾	平坦	自然	土師器・石器	SK23→本跡
25	A 2 i 5	N-19°-E	楕円形	1.36×0.97	38	緩斜	皿状	自然	—	
27	A 2 h6	N-5°-W	楕円形	0.40×0.33	73	垂直	円筒状	人為	—	
28	B 2 c5	N-20°-E	楕円形	0.48×0.39	42	外傾	平坦	人為	—	
29	B 2 c6	N-21°-W	楕円形	0.63×0.44	27	外傾	平坦	人為	—	
33	B 2 b3	N-56°-W	円形	0.23×0.22	25	外傾	平坦	—	—	SK 3→本跡
37	C 3 b4	N-30°-E	楕円形	1.72×0.96	13	緩斜	平坦	人為	—	
38	C 3 c4	N-49°-E	楕円形	2.36×1.27	29	緩斜	皿状	自然	—	
39	C 3 c4	N-39°-E	楕円形	2.52×1.20	23	緩斜	平坦	自然	—	
41	C 3 d8	N-71°-E	楕円形	1.60×0.83	28	緩斜	皿状	人為	—	
42	C 3 g5	N-4°-E	楕円形	1.73×1.10	37	緩斜	平坦	自然	—	SK61→本跡
46	C 3 i 0	N-53°-E	楕円形	2.23×0.92	24	外傾	平坦	人為	—	
47	C 3 j 0	N-12°-W	不整楕円形	1.55×1.09	28	緩斜	皿状	人為	—	
48	C 3 j 0	N-2°-E	長楕円形	1.39×0.69	18	外傾	平坦	人為	—	
49	C 4 j 1	N-49°-E	[円形]	0.95×(0.76)	28	緩斜	平坦	人為	—	
50	C 4 j 1	N-49°-E	[円形]	0.86×(0.70)	15	緩斜	平坦	人為	—	
51	D 4 a1	N-20°-E	隅丸長方形	1.76×0.75	32	緩斜	皿状	人為	—	
52	D 4 a1	N-53°-W	楕円形	1.15×0.72	24	緩斜・外傾	平坦	人為	—	
53	D 3 a0	N-77°-E	楕円形	1.23×0.78	53	緩斜	皿状	人為	—	
54	D 4 a1	N-67°-E	長楕円形	1.58×0.78	27	緩斜・外傾	平坦	人為	—	
55	C 3 b6	—	円形	0.64×0.63	14	緩斜	平坦	不明	—	
56	C 3 b7	N-19°-W	楕円形	1.94×0.95	14	緩斜	平坦	人為	—	
58	B 3 g3	N-56°-W	楕円形	1.17×0.61	29	緩斜	皿状	自然	—	
59	D 3 b7	N-39°-E	楕円形	1.27×0.92	19	緩斜	平坦	人為	—	
60	D 3 b8	N-83°-E	円形	0.78×0.73	36	外傾	平坦	人為	—	
61	C 3 g6	N-36°-W	不整長方形	1.76×1.54	36	外傾	平坦	人為	—	本跡→SK42
66	D 3 b7	N-72°-W	楕円形	1.02×0.65	17	緩斜	平坦	人為	—	
68	C 4 i 2	N-9°-W	円形	0.54×0.51	49	垂直	平坦	人為	—	
69	C 4 i 2	N-9°-W	楕円形	0.57×0.48	72	垂直	平坦	—	不明鉄製品	

第4節　まとめ

調査の結果、縄文時代の陥し穴1基、弥生時代後期の土坑1基、古墳時代後期の堅穴住居跡1軒、中世の溝跡1条、近世の墓壙1基の他に、時期不明の方形堅穴遺構3基、円形周溝状遺構1基、溝跡3条、柵跡1か所、土坑49基、ピット群3か所が確認された。

ここでは、当遺跡の特筆すべき点を取り上げながら遺跡の概要を述べてまとめとしたい。

1 弥生時代

弥生時代の遺物が表土中や遺構確認面などから採集されているが、検出された遺構は土坑1基である。その第40号土坑からは、頸部上部が欠損した広口壺が逆位の状態で出土しているが、搅乱のため大部分は壊され、或いは失われている。壺の頸部が胴部へと張り出す部分からは別個体の胴部片が内向きで出土していることから、意図的に頸部を塞いでいることが想定できる。時期は、土器の特徴から弥生時代後期と判断した。また、土器の確認状況や覆土中から底部に穿孔された形跡のある土器片が出土していることなどから、甕や壺を再利用した土器棺墓の可能性を考慮して調査を進めた。しかし、広口壺や壺の細片以外の遺物がなく、骨片や骨粉なども確認できなかったことから墓としての物証は得られなかった。

県内では、この時期の土器棺墓の報告例として西原遺跡¹⁾や原出口遺跡²⁾などが周知されている。中でも西原遺跡の第4号土器棺墓は、頸部から胴部にかけてが逆位の状態で出土しており、第40号土坑の出土状況と類似している。しかし、西原遺跡の遺物は広口壺1個体であるのに対して、当遺跡では縄文原体や胎土の違いから3個体出土していることが相違点としてあげられる。また、逆位状態の頸部を土器片で塞いでいる点なども大きな相違点といえる。

前述のように、当遺跡の弥生時代の遺構は、土器棺墓と考えられる土坑1基であり、住居跡は確認されていないため時代の様相について詳述することは難しい。しかし、遺構外から遺物が採集されていることを考えると、それらの遺物は調査区域外に弥生時代の集落が存在する可能性を示唆しているといえる。そのため、当遺跡の北東側の台地上に所在する矢倉遺跡³⁾との関連性も考慮する必要があろう。特に、第40号土坑が土器棺墓であるとすれば、当遺跡や矢倉遺跡を含むこの地域の集落と墓域の立地関係などを詳細に検討する必要がある。また、西原遺跡の土器棺墓と当遺跡の土坑（土器棺墓が想定される）の出土状況の類似点と相違点についても、墓制の地域差として捉えることができるのかどうかも検討材料であるが、検出が1例⁴⁾であることから今後の類例の増加を待ちたい。

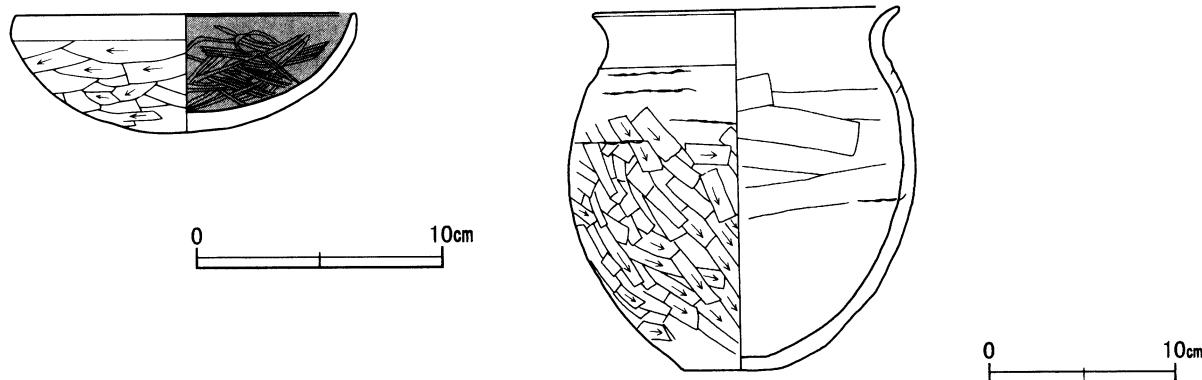
2 古墳時代

古墳時代の遺構は堅穴住居跡1軒であり、出土遺物の特徴や遺構の形態などから6世紀初頭に比定した。また、調査区南西側の小野洋治氏所有の畠からは壊や甕⁵⁾が出土（第30図）しており、遺物の特徴から6世紀末葉から7世紀初頭のものと考えられる。さらに、調査区南東部のD3d9区の確認面からは、赤彩された椀（第26図30・31）と共に第30図と同時期の甕（第27図36）が採集されている。

これらのことから、少なくとも当遺跡には、古墳時代中期から後期にかけての集落が存在していたことは確実で、集落の中心は調査区西側の平坦地の未調査区域に広がっているものと考えられる。

今回の調査で検出された遺構や遺物はわずかであるため、遺跡全体の様相は不明である。しかし、縄文土

器片や弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶・磁器、羽口、石製品など各時代の遺物が出士したことから、当遺跡が縄文時代から近世にかけて断続的ではあるが集落が営まれてきたと捉えることが可能であるが、これは今回の調査からうかがえる一部分にしかすぎない。



第30図 坂戸遺跡採集土器実測図

註

- 1) 江幡良夫「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 原田北遺跡Ⅱ 西原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第85集 茨城県教育財団 1994年3月
- 2) 江幡良夫「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 原出口遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第94集 茨城県教育財団 1995年3月
- 3) 飯島一生「北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡 後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第135集 茨城県教育財団 1998年3月
- 4) 早川麗司「茨城県内の弥生時代土器棺墓・土壙墓集成」『年報23』 茨城県教育財団 2004年10月
早川氏は、西茨城郡友部町大字長兎路字久保1000番地に所在する久保塚群の第1号土坑について、「土器棺墓の周辺から弥生時代に属する土坑は確認されなかった。」と調査担当者から教示を受けたうえで、土器棺墓が単独で存在する事例であると指摘している。これは第40号土坑が土器棺墓である可能性を高める見解である。
- 5) 小野氏によると、坂及び甕は、北関東自動車道建設以前に台地上にある陸田の所有者が、自宅から井戸水をポンプアップするため導水管を埋設したときに小野氏所有の畠地（調査区域南西側）から発見したとのことである。小野氏には実測及びその掲載を許可していただいた。感謝申し上げたい。

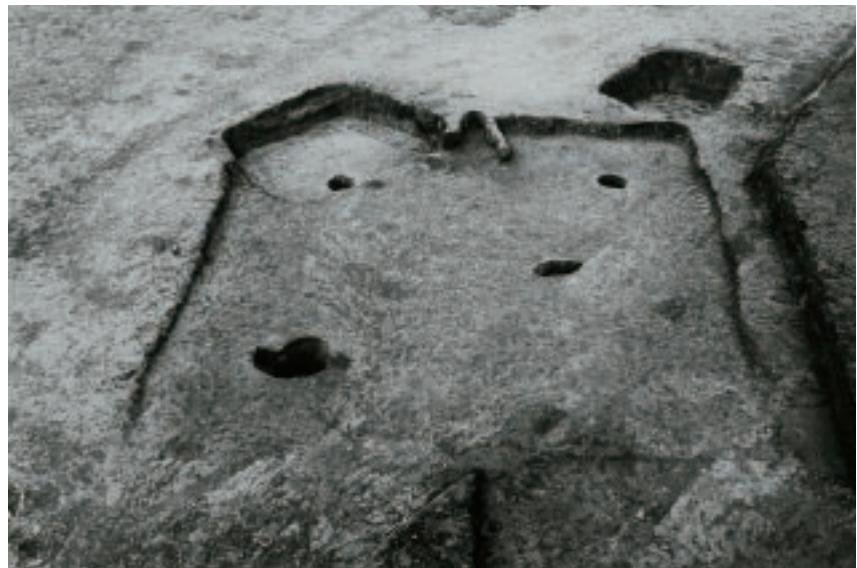


第29図 壊戸遺跡遺構全体図

写 真 図 版



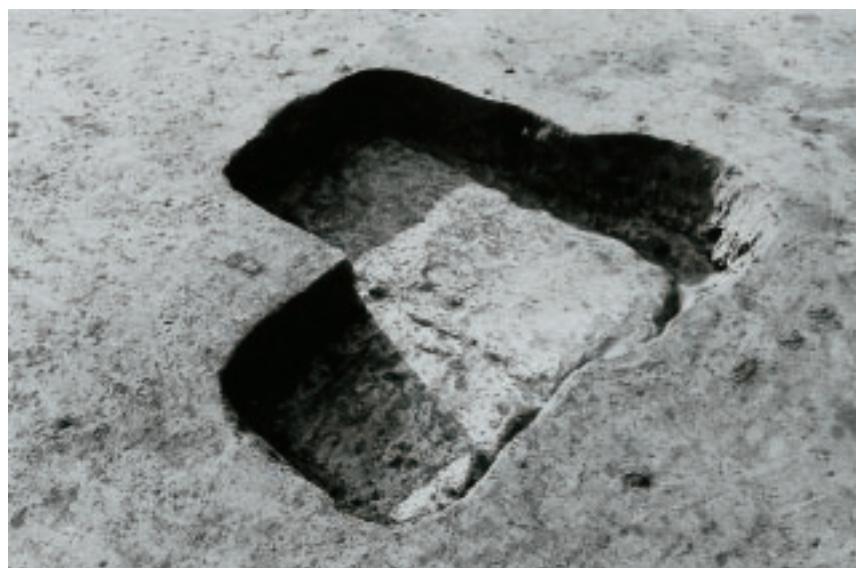
遺跡全景



第 1 号 住居跡
完掘状況



第 2 号 溝跡
完掘状況



第 2・3 号 方形豎穴遺構・
第 21 号 土坑完掘状況



第 40 号 土 坑
完 掘 状 況



第 40 号 土 坑
遺 物 確 認 狀 況



第 40 号 土 坑
遺 物 出 土 狀 況

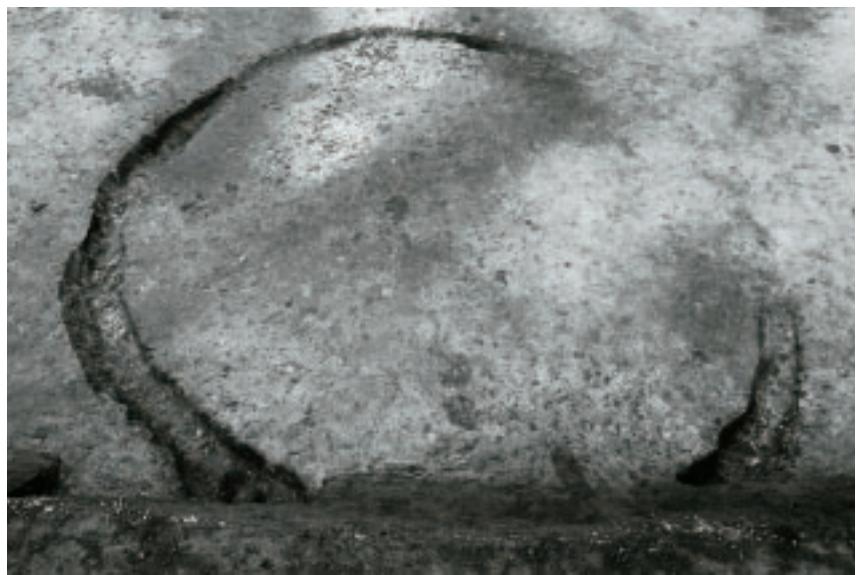
第 1 号 墓 壤
完 挖 状 況



第 1 号 墓 壤
遺 物 出 土 状 況



第 1 号 円形周溝状
遺 構 完 挖 状 況





遺構外-19



遺構外-30



遺構外-29



遺構外-39



遺構外-48



遺構外-47



P群1-16



P群3-18

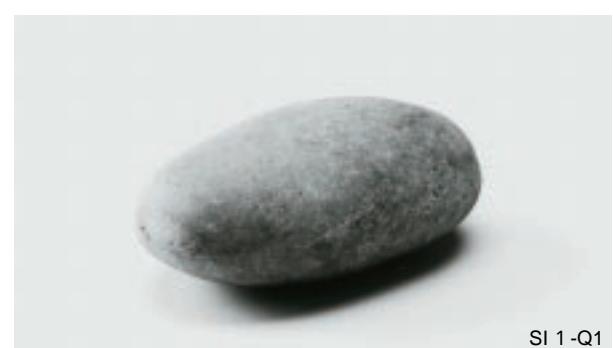
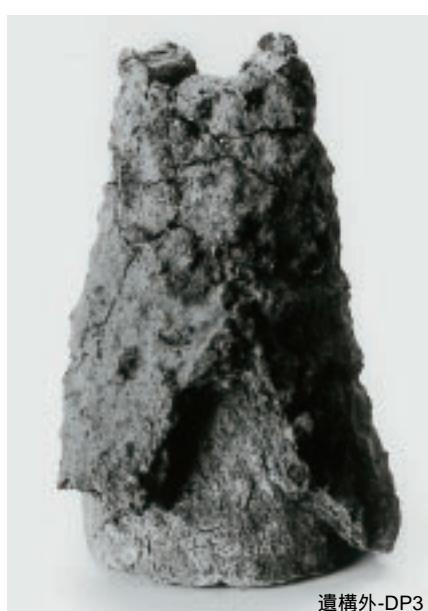


遺構外-41



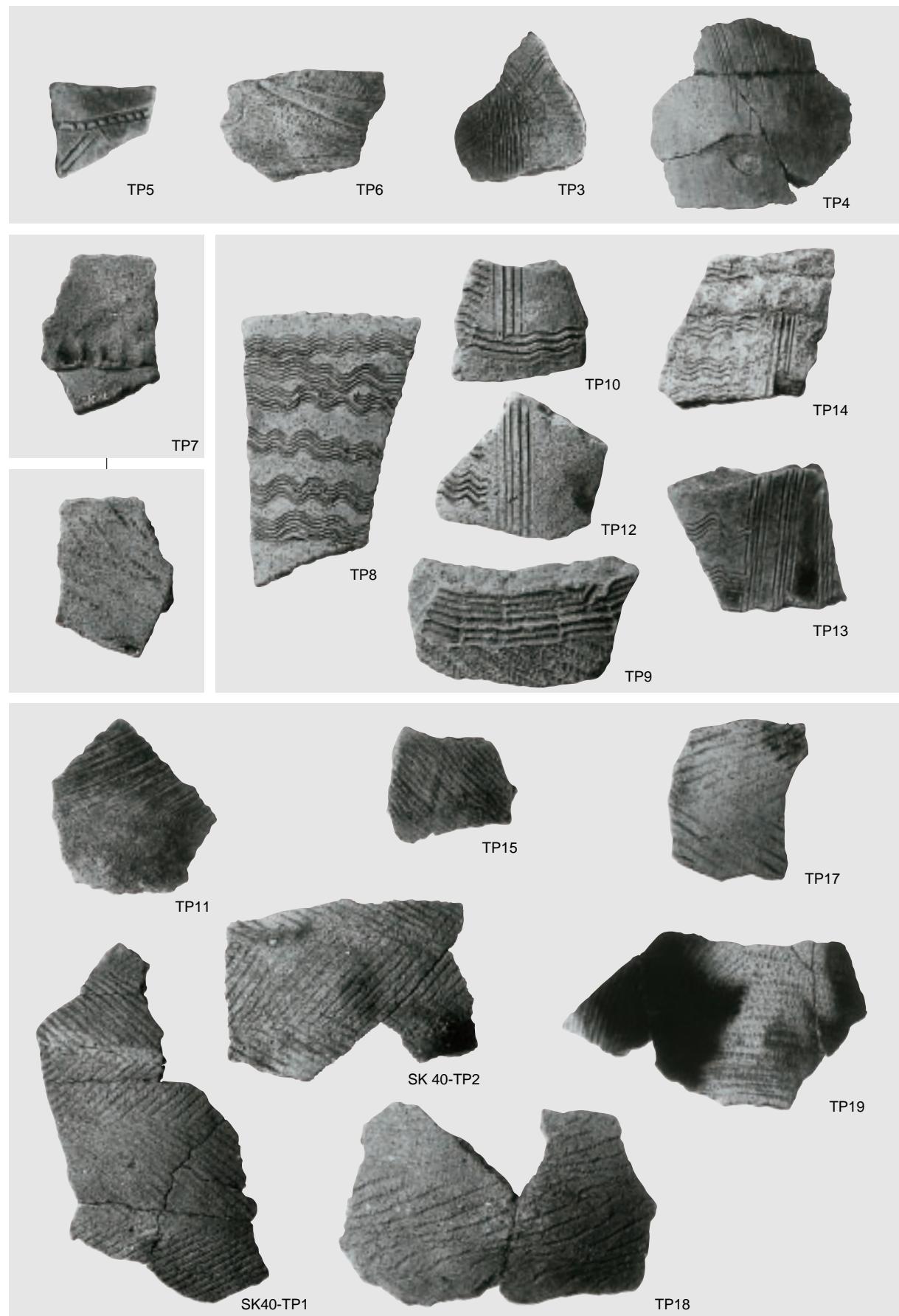
遺構外-43

P群1・3，遺構外出土遺物



第1号住居跡，第24・40号土坑，第1号土坑墓，第4号溝跡，遺構外出土遺物

P L 6



第40号土坑，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第237集

坏戸遺跡

主要地方道内原塙崎線道路改良工事地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

平成17(2005)年3月22日 印刷
平成17(2005)年3月25日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター一分館内
TEL 029-225-6587

印刷 有限会社 平電子印刷所
〒970-8024 いわき市平北白土字西ノ内13
TEL 0246-23-9051